

かうなると、老嬢はもうブセットが魔ものゝやうに思はれてならなかつた。彼女は室に引籠つたつきり、猫の爛々たる眼を怒らせ、齒をむいてゐる形相を見るのが恐ろしさに、戸を開けることすらも出来なんだ。

彼女は祈禱臺の上に膝まづいて、呻くやうに呟いた。

『神さま、悪魔がこの家にをります。わたしを狙つてをります。』

夜は寢床にうづくまつて顔を膝へ押しつけ、眼をくわつと開いて、物音に耳を澄まし、大きく十字を切りながら間斷なしに、

『悪鬼、悪鬼。』

と口走つてゐた。

が、次第に物をいふ力さへ涸れぬになつて、果は唇ばかり動くけれど、言葉はもう聴きとれなかつた。

神父

それから一週間目に、教會堂の牧師は、毎朝缺かさずに彌撒へやつて來た老嬢が、この頃ばつたり顔を見せなくなつたのを不審に思つて、彼女の家へ訪ねてゆくと、近所の人達も戸口のところへ驅けて來て、

『何か變つたことがあつたやうでございますよ、牧師さま。見てあげたいと思つても、彼女は大變氣が荒くなつてゐるものですから、誰もよう入れないので……だが貴方なら大丈夫です。』

さういひながらどんく扉を叩いたけれど、返事がない。

もう一度叩いてみたが、やはり寂然としてゐる。

『怪しいぞ。』

牧師が呟きながら戸のハンドルを廻はすと、わけなく開いた。その騒ぎをきゝつけて近所の人々がまた大勢集まつて來て、一緒にどやくと入つて行つた。

家の中はよく整頓してゐた。食堂には朝餉のときの卓巾がかけたまゝになつてゐて、茶碗の底には飲み残した少量の牛乳入り珈琲に眞珠母色の上皮が張つてゐた。蠅が砂糖の塊りの上を飛び廻り、そして白い皿には黄ばんだバターが少しばかり半溶けのまゝ残つてゐた。

『きつと寢室にゐるんだわ。』

一人の女がひだしたので、皆んなが寢室へ行つて戸をあけると、其室は錠戸を閉め窓布を引きおろしてあるものだから、眞暗で見分けがつかない。今の女がちつと耳を傾けてゐたが、

『ゐますわ、牧師さま。そら、息づかひがするでせう。』

一人の男が踏込んで行つて、窓布をあけて窓や鎧戸を押しあけると、室内がぱつと明るくなつた。主人の老嬢は、寢床の裾の方に襦袢一枚で瘦せた胸も露はに、髪をふり亂したまゝうづくまつてゐた。みんなが自分を覗きこんでゐるのに氣つくと、彼女は血糊でべとくに固まつた顔をば両手にかくして、呻きだした。

「悪魔、悪魔、悪鬼。」

牧師は彼女の手を執つて、

「わしの顔がわからんかナ？ わしだよ、牧師だよ。」

だが、老嬢はやたらに自分の額を掻きむしりながら、一段と聲を張りあげた。

「悪魔、悪鬼、悪鬼。」

牧師はこの有様を見ると悲しげに首をふつて、

「可憫さうに、氣が狂れたか。信心ぶかい女だつたがなア、わからんもんぢや。一體どうしたんだらう。御覽、自分で自分の顔をこんなに傷だらけにしてゐる。誰か早くお醫者を呼びに行つておくれ、わしがこゝに番をしてゐるから。」

人々は一人去り二人去りして、いつの間にか皆んな歸つてしまつた。老嬢は相變らず喰れた聲で叫

びつゞけた。

「悪鬼、悪鬼。」

牧師は食堂へ引かへすと、そこにブセットがゐたので、笑顔を見せて優しく撫つてやつた。

猫は横つちよに臥そべつて、首をもたげ眼を半開きにして喉を鳴らしながら、生れたばかりの三疋の仔猫に、蔷薇色の乳房をしやぶらせてゐたのであつた。

小さきもの

「裁縫は出来るの。」

「少しばかり致します。」

「煮焚も出来るね。」

「はい、マダム。」

「毎日、朝六時からこゝへ来て、家の雑用と食事の仕度をしてもらひます。給金は葡萄酒代も入れて一ト月四十フランだがね、それでいゝの。」

「それはもう結構でございますが……たゞ……」

と女中はいひかけて、遠慮がちに口ごもつた。そして、抱かれてすやくと眠つてゐる赤ん坊から眼を離さずに、可愛くてたまらないといつた風で、その子の顔へ頼すりをしながら、

「たゞ、わたしは獨りほつちでございまして、家に人手がないものですから、この赤ん坊をつれてまゐつてもよろしいでせうか。おとなしい子でございまして。御覽のとほり、ちつとも泣きはしません。お臺所の隅にでもおいていたゞけば……古い枕に寝かせておいて……ときくわたくしが乳を與ります。家に人がゐるものですから、此子の面倒を見てくれ手がございせんので。」

「困つたね。その子、幾歳なの。」

「生れて三月でございます。」

「三月の赤ん坊を此家へつれて来るつて？ 駄目よ、旦那さまはきつと可けないと仰しやるわ、心配が大變だからね。怪我でもあつたらどうするの。ひよつとして猫に喰ひつかれるとか、それにまだ乳呑兒なんだからね、大きな聲を出したり、泣いたり……いゝえ、駄目です。近所にも託けたらどうだね。」

「さう仰しやらずに、マダム……」

「お氣の毒だがね、此家は駄目よ。」

女中は顔をうつむけて、赤ん坊の眼の上に接吻をした。彼女はけつそりして、もう念をおして歎願

する勇氣もなければ、反抗心も起らなんだ。たゞ非常に疲れてるで、眠くて仕様がなかつた。この一週間といふものは、殆んど餓死をするかと思つたくらゐで、かうした返事には慣れつこになつてゐたのだ。

こんなときは、何か腕に覚えがあれば助かるのだが……彼女はあいにく何も知らない。仕事を探すにしても、女中の口より外にはなく、しかも赤ん坊といふ瘤がついてゐるものだから、何處へ行つて拒ねられた。或るときは侮辱され、或るときは氣の毒がられましたが、拒ねられることに變りはなかつた。

彼女は強ひて寂しい微笑を口元にうかべながら暇をつけた、そして當てもなく街を歩いてゐるうちに、日はとつぷりと暮れて、店頭には燈りがついて、家々の窓が一つづつ、明るくなつていつた。もう夜になつたと思ふと、往來が妙にうら寂しく、寒けに見えた。彼女は何を考へるといふこともなく、何の希望もなく、只もう當てすつぱうに歩いてゐるのであつた。

火の氣は無論のこと、一片の麵麩もない下宿の部屋へ歸つたつて、どうすることも出来はしない。いつの間にか河岸つぷちへ出た彼女は、途方にくれながらほんやりとそこに突立つてゐた。兩岸は暗くなつて、その間をばせーヌ河がゆるやかに流れてゐた。波の嘯きと、水垢の臭いと、寒さで彼女は

はぞつとした。

そこに眠りと安息があつて、困苦の結末がつけられるではないか。と、彼女はその流れに惹きよせられるのを感じた。それは恰度、朝の起き際に、「かうして寝てゐられたらどんなに樂だらう。」と思ふとき、その寝みだれた床に惹きつけられるのと同じ心持であつた。

そのとき赤ん坊が眼をさまして、けたましく泣きだした。すると、彼女は今考へたことが急に恐ろしくなつて、驅けるやうな歩調でそこを立ち離れた。

暫く早足にとつと歩いてゐるが、生憎小雨が降りだして來たので、抱いてゐた赤ん坊に風を引かせまいとして、その小さな顔を肩掛ですつぽりと包んでやつた。そして、疲れきつたふるへ聲で一生涯命にあやした。

『ねんねんよう……ねんねんよ……坊やはいゝ子だ……いゝ子だね……』

宿の戸口を入つて階段を登りかけたが、息ぐるしさうにはア〜いつて、一階ごとに立ちどまりながら、それでも六階の上まで登つて行つた。濡つぽい欄干が凍えた手にねばりついた。やつと自分の部屋の貧しい寢臺に腰をおろしたが、赤ん坊がまだ泣き止まないの、彼女は濡れた胴着をばだけて乳房を出した。

母親といふものは、子供に添へ乳をするところを見ると、不思議に恍惚とした眼付をして、莞爾莞爾しながら、子供の顔にやさしい接吻の雨を降らせるものだ。が、彼女は今、添へ乳をはじめたと思ふ間もなく乳房を引こめ、悲しさうに眉をよせて唇を噛んだ。彼女の胸は氣苦勞のために乳もすつかり涸れてしまつてゐるので、赤ん坊はその萎びた乳房にしゃぶりついて、いたいけな指で絞りださうとするけれど、乳はどうしても出ないのであつた。

赤ん坊はまた泣きだした。彼女は饑じさを紛らして寝かしつけようと思つて、赤ん坊を揺ぶつたりあやしたり、子守唄をうたつたりしながら、狭苦しい屋根部屋をあちこちと歩きはじめた。その子守唄といふのは、誰に教はつたともなく人が聞覚えてゐる舊い唄であつた。

暫くして赤ん坊がどうやら眠つたらしいので、彼女は赤ん坊の手足をのばして、暖く包んでやつてから、そうつと椅子へ腰をおろすと、涙がしきりに込みあけて來た。今度こそはいよいよ行き詰つたことをはつきりと意識した。自分で食べる麵麩もない——それは我慢が出来るとしても、子供に乳が與れなくなつたのには、ほんたうに當惑した。私生兒を抱へて、男から棄てられた彼女は、今さら誰に歎願してみやうもなかつた。何家の戸口を叩かうといふ當てもなかつた。そのうちに、ふと或る考へが浮かんで來た。「いつそこの子を保育院へ捨てよう。」初めこの考へが起

つたとき、彼女は反感で跳びあがつた。そして、

「捨てるくらゐなら、この子と一緒に死ぬるが優しだ。」

とも思つたが、しかしよく考へると、先刻だつてとても自殺をするほどの勇氣はなかつた。あの河水や寂しい河岸の景色を思ひだしてさへ、ぞつと身ふるひがするのであつた。

彼女は今、筋道を立て、そのことを熟考した。

「子供は保育院へ捨てたつて、そんなに不幸なことはあるまい。あすこでは衣ものを暖かく着せてくれて、食べものも不自由はさせない……それでわたしも獨り身になれば口すぎが出来る……今に奉公口がきまつて、いゝ保護者でも見つければ、またつれて戻ることもある。だけど、この子と別れともない！ この頃わたしを見覚えて、顔を見ればにつこり笑ふやうになつた。ほんたうにわたしのものになつた。それなのに、これつきり手離さねばならぬとは、何といふ情けないことだらう。」

彼女は決心がつかかねて、一晩中泣き沈んでゐた。朝になつて、赤ん坊は眼をさますとすぐに乳を欲しがつた。彼女は赤ん坊のくなくくになつた頸筋や、黄ばんで干乾びた皮膚を見ると、もはや自分の力ではこの子を育て、ゆけなれと思つた。

で、彼女はつひに赤ん坊を抱いて出かけて行つたが、途中で三四回も方角を訊かねばならなかつた

ほど頭がぼんやりしてゐた。外には雨が降つてゐた。赤ん坊は餓と疲れで根氣がつきて、母親の肩にうとくと眠つた。母親は保育園へつくと、少しの躊躇もなく、つかくと入つて行つた。

「何の用かね。」

係りの役員から問はれると、彼女ははつと夢から覺めたやうな風で、

「子供のことでお願いにまゐりました。」

「託けるんだね？ よろしい、その子をこつちへお出し。」

係りの人は、赤ん坊の姓名や年齢を記入してから、装飾も何もない殺風景な室へ彼女をつれて行つた。

「此室で三十分間休息して、その間によく考へて、子供をおいて行くかつれて歸るかきめなさい。」戸がしまつて、獨りほつちになると、彼女は初めて自分のやらうとしたことがはつきりと判つた。昨晚の癪癪がまたむらくと起つて來た。皮を剥がれ肉を絞られる思ひで、今にも狂氣ひになりさうな氣がした。

「かうなれば、乞食もしよう、身も賣らう。何が何でもあの子を手離してなるものか。」

しかし、やがて、それは無分別な考へに過ぎないといふことに氣ついた。もう二日自分の手許にお

けば、赤ん坊は死んでしまふにちがひないのだ。

戸口が再び開いたとき、彼女は、古い絹紐の端につけて頸にかけてゐたメタルを外しながら、

「どうぞ、これをあの子につけておいて下さい。」

さういつて、メタルを嫁母の手に託けた。それから元氣のない足どりでよろけながら、振りむきもせず、そこを立ち去つた。

昨日のやうに、街から街とさまよひ歩いたが、眼がくらんで幾度も人に衝突つた。

「あの女は酔つぱらつてゐるんだよ。」

と人々はいつた。彼女はもう街の物音も耳に入らなかつた。一度駈者から「こらつ」とこつ酷く怒鳴られ、びつくりして顔をあげると、頸筋へ馬の鼻息がかゝつてゐるのであつた。

「あら、御免なさい。」

彼女は跳びあがつて歩道の方へ逃げながら、低聲で詫をいつた。

彼女は夢中で、何もわからなかつた。赤ん坊を奪られて空つほになつた兩の腕は、重たけにだらりと垂れてゐた。

或る公園の中で、乳母達が赤ん坊に乳房をふくませたり、子供等が砂いぢりをやつてゐる前に彼女

は立ちどまつた。そして長いことそこに佇つて、莞爾々々して子供等の遊びに見とれてゐたが、ふと気がつくくと、眼をかくして逃げるやうにそこを駆けだした。

やがて夜がやつて来た。街燈の火口が霧にほやけて豆ランプのやうに小さく見えてゐた。彼女はそ

のときに思ひだした。

『昨日の今時分はあの子を抱いて、びつたりと胸に引きつけて、頬すりをしてゐたつけ……今はもう手離してしまつた。捨て、しまつた。何だか夢のやうな気がする。これから部屋へ歸つて……獨りほ

つちで、あの子の物を片づけなければならぬのか……あゝ厭だ、何て情けないこつたらう。』

これまでも左様だつたが、これからも度々見せつけられねばならぬ世間の子持ち女といふものに對して、彼女は一種の嫉妬と反感がむらくと起つて来た。そればかりでなく、今のさき彼女が公園で遊びに見惚れた、あの無邪氣な子供等までも憎らしく思はれるのであつた。

昨日の謙遜と悲歎、伏し眼がちに哀願したあのしをらしい女——それはまつたく別人のやうであつた。彼女は今、

『自分が子供を捨てた。』

といふことは思はないで、

『保育園に子供を奪られた。』

と考へこんだ。

保育園だなんて、あの人達は人情も何もあつたものぢやない。規則が酷すぎる。あの人達は、母親が子供を手離すといふことは、自分の乳房やお腹をむしり取られるのと同じだつていふことを知らないんだ——さう考へると、彼女は堪らなくなつて、しくしく泣きながら、爪で顔中を掻きむしつた。

やがて、とある四つ角へさしかゝると、彼女は怪訝さうに立ちどまつて、指を一本あけて唇を半開きにしたまゝ、ちつと聞き耳を聳てた。

四邊を見まはすと、或る家の戸口の前に何だか白いものがうごめいてゐる。屈みこんで手をさしのべたが、それがやはり悲しさうに泣きつゞけてゐるので、彼女はその白いものを抱きあげた。

それはほんの赤ん坊——彼女のよりもつと小さな赤ん坊であつた。抱いて胸におしつけると、泣き聲が少し落ちついて来た。彼女はその赤ん坊をごく靜かに揺ぶりながら、ほんやり見とれてゐると、ふいに、今までの憤りも憎しみも一つの漉りない温情の中へ溶けこんで行つた。と、嬉しさ悲しさがまた一時にこみあけて来て、すゝり泣きをしながら、矢鱈むしやうにその小さな頬つべたへ接吻をした。

それから足早にそこをすり抜け、赤ん坊を泣き止ませようとして、昨日わが子にしたと同じやうに低聲でくりかへした。

「ねんねんよう……ねんねんよ……坊やはいゝ子だ……いゝ子だね……」

彼女は赤ん坊をあやしなながら宿の方へ歸つて行つた。

情 状 酌 量

フランスアズは、倅が捕縛されたといふことを新聞で讀んでぎよつとした。

けれど、初めのうちはとても眞實と思へなかつた。それはあまりに途方もない出来事であつたから。可愛い倅はごく内氣な律儀者で、こないだの復活祭の休暇には、彼女の許へ歸省してゐた。そして隊へ歸つて行つてからまだ一月と経たぬのに、その者が賊を働いた上に殺人罪を犯したといふことがどうして信じられやう。

倅が兵隊服を着て、あのまん丸な若々しい顔に人懐っこい微笑をうかべながら佇つてゐる姿が、今もまざくと見えるやうだ。そして別れ際に、彼が、皺くちやの頬べたに接吻をしてくれたつけ——そんなことを思ひ出すと、彼女は平和な、幸福な記憶で胸が一杯になるのだ。

「きつと何かの間違だわ。人違ひなんだよ。」

彼女は肩をすほめて獨りごとをいつた。

だが、新聞では「兵卒の犯罪」といふ大標題の下に仰々しく書き立てゝゐる。それは兵營内に起つた怪事件で、しかもその犯人として、倅の名が判然と掲げられてゐるではないか。

彼女は當惑して椅子にうづくまつた。眼鏡を額にはねあけて、両手をかたく握り、唇をふるはせて獨りごとをいひながら、老ほれた飼犬が、寂然と暖かい臺所の開け放した戸口に寝そべつてゐる姿をば、きよとんとした眠つきで見るともなしに見てゐるが、やがてその視線を懸け時計の方へうつした。時計はチクタクと緩たり重々しい音で時を刻んでゐた。

そのとき誰か木戸を入つて来る氣配に、彼女はびつくりして、

「誰方。」

と聲をかけた。

近所の女がやつて來たのであつた。

フランソアズは、自分の心配事に感づかれては大變だとおもつて、すぐにこんなことをいつた。

「わたし、好い氣持で居眠りをしてゐたのよ。ほんたうに暖かくなりましたねえ。」

そして、いつもの無口にも似合はず立てつゞけに饒舌をした。問ひをかけられるのが恐ろしいもの

だから、成るだけ相手に口を開かせないやうにするのだ。そのくせ、この女は倅の事件を知つてゐるはしないか、といふことが絶えず氣がゝりだつた。

そのうちに話題も種切れになつたので、仕様事なしに黙りこんでしまつた。すると近所の女は變な顔をして、

「息子さんから暫く音信がないんでせう。」

「ちよいと手紙をくれますよ……今朝もね、お前さん……」

と答へたものゝ、どんな手紙が來たといふことは云はなんだ。が、彼女はふと考へた。どうかして倅の潔白を確かめたい。慰めてほしい。新聞が間違つてゐるんだ。倅がこんなことを仕出來す筈がない——といふ自分の考へに合榫がうつてもらひたい——さうした欲求がむらむらと起つて來た。

で、彼女は新聞をひろけて、

「お前さん此紙を讀んで？……奇態なこともあるもんですね。」

左りけなくいつたつもりだが、聲が咽喉にからみついて、眼には涙が一杯こみ上げて來た。

「わたしも随分鈍馬ね。初めてこれを讀んだときは、もう吃驚して、どうしたらいいか解らなかつたのよ。何て馬鹿でせうね。」

それでも、相手が何ともいつてくれないので、

「ねえ、變ちやありませんか。ほんたうに途方もないことだ。」

「まったく變ね、同じ聯隊に同じ姓名の兵卒が二人ゐるなんて。」

さういつてくれたので、フランソア婆さんは急に元氣ついて來た。

「さうく、わたしも左様おもつたの。同じ姓名の兵卒が二人あつて、そして犯人はうちの倅ぢやない……」

「兵隊屋敷のことはわたしにも解りませんがね、」と近所の女はいつた。「たゞね、お訊きしようとおもつて來たのよ。そりや同名異人であれば結構ですがね、若しかそれがお前さん許の息子さんだつたら、桶屋さんに入つた泥坊も多分あのぢやないかなんて、村では噂をしてゐるのよ。桶屋さんで三百フランのお金を盗られた一件ね。あれは恰度こちらの息子さんが復活祭の休暇で歸つてゐたときのことなんだからね。」

それを聞くと、フランソア婆さんはすつくと起ちあがつた。死人のやうに蒼ざめて、兩の拳をたく握りしめてゐた。

「ひどいことを云つたものね、飛んでもない……そ、そんなことがあるもんですか……よくも云へた

ものだ……一體何の怨みがあつて、わたし達にそんな濡れ衣を着せるんだね……あゝ、あの子が可憐さうだ……わたしは、ど、どうしてもこの證明を立てなければならぬ。」

云ふより早く、彼女は木履も穿かずに、上草履を突かけたまゝで不意に外へ飛びだすと、驅けるやうにして眞直に停車場のある町の方へ行つた。

町へ着くと、恰度十一時が鳴つてゐた。彼女はすぐ汽車に乗つた。が、心は少しも休まらないで、却つて不安を増すばかりであつた。「倅にそんなことがあるものか。」といふ考へは何時の間にか消えてしまつて、「若しか事實だつたら……」と、そればかりが氣づかされた。

途中の焦燥しさは、まるで際涯もない旅をしてゐる氣持であつた。畑や村が車窓をかすめて後へ後へと消え、沿道の電線は、轆轤からでも眺めるやうに、目まぐるしく高まつたり陥ちこんだりした。やがて目的地へつくと、今度は、事實を聴かされる時があまりに早く來たやうな氣がした。却つて身ぶるひを感じた。そして停車場を出ると、ひとりでに込みあけて來る祈禱の文句に、自分の祈願をも緬ひませて一心に唱へはじめた。

「おゝ、お慈悲ぶかい聖母さま、あなた様はこんな事件の起るつていふことを、決してくお許しにありませんまい……今にあなた様の御前に、御禮のお禮りを捧げることの出來まするやうに……」

兵營の嚴めしい鐵門をくゞつて、掃除の行きとゞいた廣庭を歩いてゆくと、やがて四角い營舎が幾つもつゞいてゐるところへ出た。恰度夕暮の休憩時間だったので、兵士等は入口の階段に腰をかけて何か無駄話に花を咲かせてゐた。

フランソアズは倅から教はつて、兵營内の種々の階級のことをよく心得てゐたので、一人の軍曹の前へ行つて叮嚀に問ひかけた。

「軍曹様、少々物をお訊ねしたうございます。わたしは、あの……」

と云ひかけてちよつと躊躇つた。内心の不安を氣取られては大變だと思つたのだ。

「實は倅のことにつきまして。倅はジュール・ミシヨンと申します。第三中隊でございますが、若しや彼が……いゝえ、彼と面會が出来ますでせうか。」

と強ひて笑顔をつくつて、

「わたしは彼の母親でございます……母親でも面會が出来ないと仰しやるんですか？ それはまた何故……彼は何處にをりますでせうか。それとも病氣で……では、何故會へないでせう……はい知つてをります……いゝえ、それは存じません……捕まつて……警察に……でなくつて、あの、營倉に？」

がつかりして兩手に顔をうづめ、

「おゝ、さては眞實であつたか。エ、口惜しい。」

彼女はよろめきながら、そこを立ち去つた。それから營倉へ行つて訊くと、倅は獨房に入れられてゐるといふことであつた。獨房と聞けばいよく恐ろしくなつた。たつた獨りで嚴重に監禁されてゐる倅の様子を想像すると、堪らなく悲しかつた。

とにかく町の辯護士に頼んだらよからうと勧められるまゝ、彼女はふらくくと兵營を出て、或る辯護士の許へ行つて、その人から事件の内容をすつかり話してもらつた。聴くと、倅の犯行はもう疑ふ餘地もない。人殺しをやつて金を盗つたことは明らかである。彼の敷布團の下から六百フランに近い金が發見されたので、包みきれなくなつて、すつかり罪狀を自白したといふことだ。

フランソアズは散々泣いて、一目でもいゝから倅に會はせてと願つたけれど、素よりさうしたこと

の許さるべき筈もなく、がつかりして村へ歸つて行つた。倅の事件はもう村中に知れわたつてゐた。それで彼女は、村人から顔を見られたり物をいはれたりするのが恐ろしいものだから、夜中に密とわが家へ歸つた。

一旦家へ歸ると、今度は人を恐れて縁の下へもぐりこんだ宿無し犬のやうに、一步も外へ出ようと

しない。戸口は締めきり、窓には錠戸をおろし、そして毎朝、新聞屋が戸の隙間から挿しこんでゆく新聞をば、彼女はふるへながら讀んだ。

新聞には俸の罪状が詳しく連載され、なほ餘罪があるといふことまでも出てゐた。その記事によれば、證人として召喚された人達は、桶屋の金を盗つたのも俸の仕業であると申し立てたらしい。しかし俸は何ほ何でも、わが村で賊を働くやうな男ではない——それだけは、誰が何といつても濡れ衣だ

——初め彼女は堅くさう信じてゐた。けれども、終ひにはそれさへ危つかしくなつて來た。

それから一ヶ月経つて、彼女はまた辯護士のところへ行つた。が、この度は面會の手續などを強請まなかつた。さうかといつて、夢々わが子に愛想づかしをしたといふのではないが、只もう氣恥かしさで一杯だつた。

「俸はどうなるでせうか。先生のお力で死刑だけは免れるやうに、どうぞお助けをねがひます。」

「お氣の毒だが、死刑らしいね。尤も何か酌量されるやうな情狀でもあれば、助からぬとも限らんが。」

「情狀つて云ひますと、そりや何ういふことでございませう。」

「それは判事の眼から見ても、罪が軽くなるやうな事情をいふのさ。例へば、或る男が他人の金品を盗

んだとする。しかしそれが、貧乏でわが子が餓死するといふやうな場合であつたとすれば、裁判官もその事情を酌んで幾らか罪を軽くする。それを情狀酌量といふのだよ。だが今度の事件ではさうした事情もなし、おまけに初犯でもない。前にも一度竊盜をやつたことがある。尤も當人は、前の自分の仕事でないといつてゐるがな。あゝ、いゝともく、出来るだけの盡力はしてあけるよ。」

フランソアズは、そのまゝわが家へ歸つたが、こんなに疲れて、こんなにがっかりしたことはなかつた。

初めて聞いた「情狀酌量」といふ語を考へると、何だか氣になつて、居ても起つてもゐられな

い。裁判官に刑を軽くして貰へるやうな巧い口實をば、何處から手繰りだしたらいいだらう？ 生憎そんな口實は一つも思ひつかぬ。頭にうかぶものは、わが子の犯した恐ろしい罪業ばかりだ。どうしたつて死刑を免れるといふことは出来さうもない。

そのうちに、たうとう公判の日がやつて來た。フランソアズはまた町へ出かけて行つた。それは刑場への最後の歩みにもひとしかつた。汽車に乗るとまづあらゆる聖者の御名を呼びかけてはお禱りをさゝけたが、その間にも例の「情狀酌量」といふ語が、絶えずその單純な頭にひびいてゐた。そして彼女は幾度もそれをくりかへした「情狀酌量、情狀酌量」と。

裁判所へ行くと、他の証人達とともに、暗い、陰気くさい控室に暫く待たされた。人々は彼女の姿を見ると急に聲を落して、ひそひそと何か囁き合つた。やがて順番が来ると、彼女はふら／＼する歩調で、法廷の証人席へ入つて行つたが、暗い控室から急に明るく出たので、眼をバチクリさせながらも、すぐに被告席にゐるわが子の姿を認めた。彼は藍色の太い縞目のあるハンケチに顔を押しあてて、續げざまにはけしく歎息してゐた。その哀れな姿を一目見るとフランソアズは堪らなくなつて、いきなり立ち上つて、正面に裁判官の方へ向き直つた。

彼女は自から申請して証人となつたのであるが、さて、一體何を申立てようとして法廷へ出て来たのか、自分にも判らなくなつてしまつた。

實はこの事件については全く事情を知らなかつたし、今さら云ふべきこともないのであつた。そんなら、何故法廷へなど出て来たのか。他に理由とてもないが、彼女は犯人の母親だから出て来たのだ。犯人を産み落して乳をやつて、可愛がつて育てあげたその母親だから。

彼女は訊問に對しては、大抵簡單な身振りか、不器用な言葉で答へた。法廷は水を打つたやうに寂然となつた。人々の同情は、この黒衣を着て面糞れのした百姓婆さんに集まつた。

「被告はお前の實子か。」

判事が問ふと、

「はい。」

「お前は被告の素行上の缺點について、何か氣づいたことはないか。」

「何もございません。」

「被告はこれまでに、朋輩から何か悪い感化を受けたといふやうなことはないか。」

「悪い友達など一人もございません。この子の死んだ父親といふのは、誰からでも好かれ、また敬まはれてをりまして、至つて嚴格な人でございましたから、なか／＼この子が悪い友達をこしらへるところではございません。また、わたしとしても、悪いことは黙つて見てゐられない性分でございます。子供の躰は、それは八釜しくいたしたつもりでございます。」

「うむ……左もあらう／＼……」

判事はうなづいてゐるが、やがて被告の方に向つて、

「被告、お前は両親が律儀者であることを十分承知してをつたな。その両親の好い評判をお前は利用したのぢやらう。そして殊更、母親の許に歸省してをつた際に、一回竊盗を働いたのであらう。それ故、このやうな律儀者の子にお前のごとき悪人があらうとは、村の者も氣づかなかつたのぢや。たと

へ罪人でも場合によつては「自分ばかり悪いのではなく、周囲の感化をうけて遂に罪を犯した」と申し立てることも出来るものぢや。いゝか。しかしお前は、さうした申し開きも立つまいがな。」

フランソアズはそれを聞くと、心中に何か非常な決心を堅めたらしく、小さな眼が涙の底から異様に輝いて、ちつと首をうな垂れてゐた。と、後女は突然に確かりした聲でいひだした。

『お許し下さい、判事様。もう白状しなければなりません。俵奴が大それたことをいたしましたして、大罪でございます……けれども俵ばかりが悪いのではござりませぬ……たつた今わたしは、身に疚しいことがないと申し上げましたけれど、實は嘘を申しましたので、村の桶屋から三百フランの金を盗つたのは、このわたしでございます……恰度ジュールが復活祭の休暇で歸つてゐたものですから、彼にそのことを打聞けますと、彼は可憫さうに……まだ若いだけに……大そう狼狽して、それは大變だ、お母が他人から後ろ指を差されることになつては困る……一圖にさう考へこんだものと見えて……その後彼が他人様のお金に手をかけたのも、つまりそのお金でもつてわたしの盗んだ金を返して、わたしの罪を救ひたいばかりに致したこととございます……ところが彼は忍びこんだとき、生憎願ひがれたものですから、眼がくらんで、殺す了見もなく斬りつけたのでございませう。』

こゝまで陳べると、呼吸切れがしてちよつと黙りこんだ。それから一段と微かな聲で後をつづけた。

『わたしは、初めに虚偽を申しました。ほんたうに罪深い女でございます。彼に悪い手本を見せたのは、このわたし奴でございます。何卒わたしを罪にして下さい……そして彼のためには「情状酌量」をお願ひいたします……重々悪うございました、判事様。』

フランソアズはかう云ひ終ると、一そう呻きにお辭儀をした。肩をおとし、顔を俯むけ、消えも入りたき風情であつた。

裁判の結果は、無期懲役といふ判決が下つて、俵は辛くも死刑を免れることが出来た。

あはれな母親は、それ以來、村中から除け者にされてしまつた。

彼女は間もなく重患でどつと床就いたが、誰一人眞身に介抱をしてくれる者もなく、あはれ寂しく死んで行つた。すると村の人々は、聖ばかりの念佛を唱へて、遺骸は厄介拂ひでもするやうにさつさと墓地の片隅へ埋めてしまつた。そこは、村の墓地のうちでも一番かけ離れた隅つこのところで、どんなに天氣の好い日でも、お寺の本堂や鐘樓の影さへも射さないやうな場所であつた。

この説話は、私が偶々彼女の墓の傍で、人から聴かされたのである。

墓といつても、雨風に打たれた、黒木の質素な十字架が一本建つてゐるばかりで、それに、朽ちかけた珠數だまの環が一筋、よぢれてところ／＼ばら／＼になつたまゝ懸つてゐた。そしてその十字架

の表面には、次の文字がはつきりと讀まれた。

フランソアズ・ミシヨン之墓

彼女ノ一子ヲ審ケル判事 建之

集 金 掛

ラヴノオは、同じ銀行に十年間も集金掛を勤めてゐて、模範行員と呼ばれた男であつた。塵ほどの失策もなければ、只の一度だつて間違つた帳記けを發見されたこともなかつた。

係累のない獨り者で、やたらに友達をつくりもしなければ、カツフエなんかに入入りするといふ噂も聞かぬ。それに色戀の沙汰もなく、只もう満足してその分を守つてゐるやうであつた。

「そんなに大金を扱つてゐると、さぞ誘惑を感じるでせうね。」
人がそんなことを訊くと、

「なアに、自分の所有でないから金だと思ひやしません。」

と彼は落ちついて答へるのであつた。

近隣の人達も彼は確かな男だといふので、何かの時には意見を求めたり、口をきいてもらつたりす

るくらゐだつた。

ところが、彼は或る集金日に出て行つたまま、夜になつても歸つて来ない。誰もこの男に不正があらうとは思はないが、ひよつとすると、悪漢の手にかゝつたのではないかと心配しだした。警察の方で、その日彼が立ち廻つた先を調べてみると、一々几帳面に手形を出してはその金額を受取り、最後にモンルージュ門附近の取引銀行へ廻つたのが晩の七時頃で、そのときは、二十萬フラン以上の金が財布に入つてゐたといふことがわかつた。

さて、それから何うなつたか行き方が知れない。城壁附近の空地や、その邊に散在してゐる小舎、物置などを限なく捜したけれど無効であつた。なほ念のために、各地方や國境の各驛へも電報を打つた。

が、銀行の重役達の警察側の見當では、賊が金を奪つた上に彼を殺害して、屍體を大河へ投げ棄つたものと見た。若干の確かな手がゝりもあつた。それによれば、常習的強盗團が前々から企んでやつた仕事といふことは、殆んど疑ふ餘地がなかつた。

この事件は、翌くる日になつて、巴里の各新聞を賑はした。ところが、その記事を読んで「どんなもんだい。」と肩を聳やかしたのは、當のラヴノオであつた。

敏捷な警察の探偵犬もつひに探しあぐんだとき、彼れラヴノオは、外ブルヴァルからセーヌ河の河岸つぶちへ出て、とある橋の下へ忍びこんだ。そして夜前からそこへ隠しておいた通常服に着かへて、二十萬フランの金を衣囊にしよせ、脱ぎすてた制服はグル／＼巻きにして、大きな石を結びつけて大河へ投げこんだ。それから無難に市内へ舞ひもどつて来て、その晩は或る旅館に泊つてぐつすり寝こんだ。

かくて彼は、たつた數時間で立派な賊になつてしまつたのだ。

その勢ひに乗じて國境から高飛びでもしさうなものだが、彼はなか／＼恰憚な男だから、二三百キロメートルぐらゐ突撃つたところで、どうせ憲兵に捕まるといふことをよく知つてゐた。妄想で當てずつほゝうな樂觀などはしない。どのみち逮けられることは判りきつてゐたからである。

そればかりでなく、彼は一つの奇抜な計畫をもつてゐたのだ。夜が明けると、彼はかの二十萬フランの紙幣をば大きな紙袋に入れて、五所も封印を施し、それを持つて或る公證人の許へ行つた。

「伺つたのは外でもありませんが、實はこの包みなんです。中味は有價證券ですがね、私は今度遠い旅へ出なければならぬので、何時歸れるかわかりませんが、とにかく私が歸つて来るまで、この財産

を保管して頂きたいんです。さういふことがお願ひ出来ませうか。」

「え、ようござんす。只今預り證をあげます。」

しかしラヴノオは、考へてみると、預り證など貰つたつて置きどころに困る。その預り證を他人に託しておくことも出来ない。といつてそんな書類を身につけてゐると、それが手がかりになつて、肝腎の金を没収されるだらう。この思ひもかけぬ障得に彼は少なからずまごついたが、やがて左あらぬ態でいつた。

「私は獨り者で、友人も親戚もないんです。それに、今度の旅は相當に危険が伴つてゐるので、預り證などいたゞいても紛失したりしては可けませんから、とにかく品物だけ金庫へ保管しておいて下さい。私が歸つて来れば、貴方なり貴方の後継者なりに、自分の姓名をいつて返して貰ひます。」

「だが、それでは……」

「いや、「本人が名乗つて受取りに来た場合に限り引渡すこと」と包装に書いておいて下さい。無事に歸つたら取りに来ます。」

「よろしい。それで御姓名は？」

「ジュヴェルジエ……アンリ・ジュヴェルジエつて云ひます。」

すらくと出鱈目な姓名をいつてのけた。

彼は公證人の門を出ると、初めてほつとした。これで筋書の第一巻は豫定どほりに行つた。いつ何時手錠をかけられたつて差支がないのだ。贖品へはもう誰の手もとゞかないんだ。

彼は冷靜に熟考して、これだけの處置をしたのである。刑期が終つてから、この預け物を受取ればいゝのだ。誰も妨げる者があるまい。牢屋で四五年辛抱をすれば、あとは金持ちになれる。得意先をうろく集金などして歩くよりも、どんなに氣が利いてゐるか知れない。そのときは田舎へ隠退するんだ。知らぬ土地へ行けば、金持ちのジュヴェルジエ様で立派に通る。律儀な慈善家になりすまして平和に、圓滿に、餘生が楽しめるわけだ——無論この財産の幾分を慈善事業にも使ふつもりなのである。

それから一日待つて、隠匿した紙幣の番號が全く判明してゐないことを確かめてから、彼は巻煙草を啣へながら、悠々と警察へ行つて自首をした。

大抵の人間は、こんな場合に何かつくり話を發明するものだが、彼は拐帶した事實をてきぱき白狀した。時間が惜しいからだ。しかし裁判のときに、かの二十萬フランの金をどう處分したかについては、一言も眞實を吐かなかつた。

「存じません。共同ベンチに眠てゐる間に拘られてしまいました。」

これ以外は、知らぬ存ぜぬの一天張りで押通した。

従來の素行が善良だつたおかげで、僅かに五年の懲役を宣告された。彼は平氣でその判決を聞いた。今年三十五歳だから、四十には、自由な金持になれるわけだ。それゆゑ五年ぐらゐの懲役は少しの、そして已むを得ない犠牲だと観念したのである。

入監後は、よく規則を守つて、銀行に於て模範行員であつたやうに、こゝでも模範囚人といはれた。そして焦らず悲觀もせず、遅々として日數の經つてゆくのを待つた。たゞ健康を害ねないやうに一生懸命に要心した。

たうとう待ちに待つた出獄の日がやつて來た。

ラヴノオは、少しの貯蓄を役人から還してもらつて牢屋を出たが、何を措いても公證人のところへ例の託けものを取りに行かうといふ考へで頭が一杯だつた。で、彼は歩きながらその場面を想像してみた。

まづ戸口を入ると、あの事務室へ案内されるだらう。ところで公證人はおれの顔を見覚えてゐるか知ら。鏡が見たいものだ。随分老けて、苦勞をした人相が現はれてゐるにちがひない。いや、公證人

は思ひだせないでまごつくことだらう。ハハア、それも時にとつてのお愛嬌だ。」

「どういふ御用ですか。」

「五年前にお預けしたものを受取りにまゐりました。」

「物は何でしたかな。そして御姓名は？」

「私の姓名は……」

こゝまで考へると、ぐつと行きづまつた。

「はて訝しいぞ。あのときの姓名を忘れるといふ筈はないがなア。」

しきりに記憶を捜した——けれど、空つぽだ。

彼は共同ベンチに腰をおろしたが、何だか力が抜けて行きさうなので、一生懸命に氣を取りなほした。

「確かりしろく。落ちついて……えゝと、何だつけ……あの姓名の頭字は？」

夢中になつて一時間も考へこんだ。記憶を絞りださうと焦つた。思ひだす端緒をいろく捜したけれど、もう一呼吸といふところまで行つてゐながら、結局思ひだせず、時が経つばかりだつた。そのくせ、その姓名が眼の前でダンスをやつたり、ぐるく廻つたりした。姓名の文字の一つ一つが盛ん

にとんほがへりをやつたり、連結がつたやつがちら／＼して消えたりした。それがすぐにも手のとゞきさうなところにて、眼先にちらついて、今にも唇へ上りさうになつてゐながら、つひに思ひだせなかつた。

初めは單に當惑だけだつたが、焦るにしたがつて、非常に苦しくなつて來た。熱湯のやうなものが脊筋を上つたり降りたりした。筋肉がひきつゝてちつと坐つてゐられなくなつた。両手はちゝこまり唇が馬鹿に乾いた。

泣きたくて堪らなかつた。一方にはまた、何とかして思ひださねばならぬといふ氣がする。が、焦つて注意を凝さうとすればするほど、かの姓名は遠のいて行くのであつた。

彼はベンチから起ちあがつて地團駄ふんで、獨りごとをいつた。

『焦ると駄目だ。却つて可けない。うつちやつておくと、ひとりでに思ひだせるものさ。』

だが、いかに平氣であるようにしても、一度取憑いたその懊惱を追除けるわけには行かなんだ。往來の人の顔を見たり、店の飾窓を覗いたり、街の物昔に耳を傾けたりして氣を紛らさうとするけれど、一向無駄であつた。見れども見えず聞けども聞えずで、頭の中は絶えず例の大問題に惱まされてゐた。

『何だつけ、何だつけ。』

さうして當てもなく歩いてゐるうちに、とつぷりと日が暮れてしまつて、次第に夜が更けていつた。街は寂然となつて往來も杜絶えた。

彼は疲れきつて、とある旅館へ飛びこんだが、室がきまると着のみ着のまゝ寢床へふんぞりかへつて、數時間頭をひねつたけれど、どうしても思ひだせないで藻掻いてゐるうちに、曉け方になつて正體もなく眠こんだ。

目が覺めたときは、陽が高々と昇つてゐた。寢床の中で久しぶりにのう／＼と手足を伸ばしたら、いゝ氣持だつた。が、ふと姓名のことを考へると、また悩みがはじまつた。

『何だつけ、何だつけ。』

おまけにもう一つの新しい感情が、その惱ましい心に蔓こりだした。それは一種の不安——かの姓名が永久に思ひだせなかつたら何うしようといふ不安だ。

彼は跳びおきて旅館を出て、かの公證人の事務所の邊を、何時間といふ間當てもなく歩き廻つた。やがて又その日も暮れてしまつた。彼は兩手で頭を押へて呻いた。

『あゝ、おれは狂人になりさうだ。』

今恐ろしい懸念が彼の頭を占領してゐた。といふのは、彼が公證人に預けた二十萬フランといふ紙

幣は、勿論不正手段で取つたものだが、どうもそれがふいになりさうだ。その金が欲しさに五年間懲役をつとめて来たのに、今その金に手を觸れることも出来ぬとは何といふ情けないことだらう。紙幣は彼を待つてゐる。だが一語——たつた一語思ひだせないために、越えがたい鐵壁がその間を隔て、しまつたのだ。

彼は、理智が靜止らない秤のやうにふらついてゐる氣持がして、拳骨で自分の頭をがんぐ叩いた。醉漢のやうによろけて街燈の柱に突當つたり、歩道の止め石に躓ついたりした。かうなると、煩悶だの懊惱だのといふ程度を通りこして、もはや全存在——身も魂もあけて狂亂してしまつたので、とても思ひだせる氣づかひはなかつた。妄想で何者か、耳元にせ、ら笑ひをしてゐるのが聞えた。往來の人がみな自分を指さしてゐるやうな氣がした。

彼はすん／＼步調を速めて、やがて驀直に駆けだした。幾度も人に衝突した。そこが往來だといふことも忘れてしまつたのだ。彼はむしろ突き仆されるか、轢かれるかして死んでしまひたかつた。

「何だつけ、何だつけ。」

何時の間にかセーヌ河岸へ出ると、その濁つた綠色の水面には星影がきら／＼と映つてゐた。彼はす／＼り泣きをしながら呟いた。

「何だつけ。あゝ、あの姓名、あの姓名。」

彼は、河岸の段々を水際へ降りて行つた。そして熱る顔や手を冷さうとすると、ひどく呼吸が喘んでゐた矢先なので、そのまゝする／＼と河面へ引きずりこまれた。咄嗟に、熱い眼がかくれ、耳がかくれ、たうとう全身落ちこんでしまつた。這つてゆくのを感しながら、岸が峻しいものだから取りつくことが出来ず、見る／＼とすつほりと陥りこんだ。

總身冷たい水に浸るとぞつとして、矢鱈むしやうに藻掻きながら、腕を突きだし顔を擡げたが、一度すつほり沈んで、間もなくひよいと水面へ顔が出た。と突然満身の努力と、もに、眼を皿のやうにして叫んだ。

「あつ、思ひだした、助けてくれい……ジュヴェルジエだつた……ジュヴェル……」

あひにく、河岸には人つ子一人通らなかつた。漣がほちやく／＼橋柱にくだけてゐるが、今彼が沈みぎはに思ひだした姓名は、その寂然と暗い橋裏のアーチに空しく反響した。氣だるさうに起伏々々してゐる河面には、河岸の白い灯や、紅い火がちら／＼とダンスをやつてゐた。

そここのところだけ微かにさわぎ立つた波は、一しきり繫船場の護岸をたゞいてゐるが、やがて、すべてが元の靜寂にたちかへつた。

父

最後の一寸の土を墓穴へかぶせてしまつて、お終ひの挨拶がすむと、父子はゆつたりした歩調で家の方へ歸つて行つたが、その一歩々々がひどく大儀さうであつた。二人とも無言で歩いてゐた。長い混雑の後に起るくたびれが急にでてきて、物をいふさへもおつくうだつた。

家へ歸つてみると、柩に供へた花の香氣が、まだそこいらに残つてゐた。この數日來、多數の人の出入りやら悲歎やらで込合つてゐたが、今は家の中が靜閑とがらんどうになつて、妙に改たまつた感じがするのであつた。

年老つた女中が一足先きに戻つて、後片付をすましてゐた。父子は、まるで長旅からでも歸つて來たやうな氣がした。そのくせ、歸りつくなりほつとして「あゝ自分の家ほどいゝところがない。」といふやうな、晴れぐしした氣持にはなれなかつた。

しかし家の中の體裁は、前と少しも變つたところがなく、飼猫は例のごとく爐邊にうづくまつて、ごろ／＼喉を鳴らしてをり、そして冬の日射しが柔かく窓硝子を染めてゐた。

父親は爐のそばに腰をおろし、首をふつて溜息をつきながら、

「可憫さうだつたな、お前のお母さんは。」

さういつたかと思ふと、涙が一杯に湧いてきて、歎きと、街の冷たさと、室内の急な暖かさで赤く

なつたその好人物らしい丸顔を傳はつて、はらく／＼と流れた。

彼は暫く黙りこんで、猫の喉鳴きや、時計のチクタクや、火皿の上に薪のはねる音を聞いてゐたが、何だか物足りない。それ以上にもつと何かを聞きたいやうな心持だ。けれどまた一方には、死んだ者は永久に死んでしまつたが、自分は幸ひにまだ生きてゐるといふ、一種の満足に似た感じを意識しながら、悴の方へ話しかけた。

「お前はジュボン家の人達に會つたかい。野邊送りに來てゐたがな。あの御老體も來てくれたので、ほんたうに難有かつたよ。お前のお母さんは彼家の人達が大好きだつたんだ。ときに、お前の友達のブレマールは來てゐるかい。多分來てくれたらうが、あのやうに大勢になると見分けがつかんもんだな。」

父親は再び吐息をついて、

『あゝ、お前も可憫さうだな。』

二十五にもなつたこの大きな倅のことを考へると、彼は一層やさしく、いたはるやうな氣持になつた。そして憂鬱な眠つきで、薪の燃えるのをちつと見つめてゐた。

倅は父親のそばに黙然と坐つてゐた。

そのとき、老女中が音もなく戸をあけて、静かに入つて來た。

『御兩人さま、さう沈んでばかりゐらしては困りますね、御夕食を召上らなければいけません。』
父子は顔をあげた。

なるほど有理なことだ。食事をせねばならぬ。生活は元どほりにつゞけてゆかねばならぬ。氣持よい空腹を感じながら、心づくしの食卓につくことが楽しみだつた以前とはちがつて、今は、單に胃腸が空つほになつた動物のひもじさに過ぎないけれど、とにかく腹は空つてゐた。が、場合が場合なので、腹が空つたといふやうなことを明らさまいひだしかねてゐたのであつた。

今女中から注意されて、父子は顔を見合つた。廣すぎてさびしくなつた食卓に、父子二人がはじめて差向ひで食事をしてみたくもあつたが、お互ひにそれが却つて寂しさを増しはせぬかといふ懸念も

あつたのだ。

父親はまたも涙ぐんで、

『さうく、有理だ、すぐに準備をしてくれ。ジャンヤ、お前も一緒に食べるがいよ。』
倅はうなづいて起ちあがると、

『僕は着替へして來ます。』

足は機械的に母親の室の方へふらふらと行つて、戸のハンドルに手をかけたとき、老女中がそつと追かけて來て、低聲でいつた。

『ジャン様、貴方にお渡しするものがございます。お母様のお手紙ですがね、恰度八日前に、御病氣がもういけないといふことが御自分でわかりになると直ぐお書きになつたので、お亡くなりになつてからお渡しするやうにといふ、お云附でございました。これがそのお手紙でございます。』

ジャンは怪訝さうに立ちどまつて、女中の顔を見た。女中は手紙をもつた手先がふるへて、妙にためらひながらジャンの様子を窺ふやうにしてゐた。ジャンは何だか只ならぬ祕密、もしくは非常に悲しいことを、今自分が知るのだと覺つた。

『手紙をこつちへお出し。』

その手紙をひつ奪るやうにして母親の室へ入ると、夢中で戸をしめきつて鍵をかけた。寢臺の蒲團がひつそりと平らで、寢臺幕がひろく開けしほつたまゝになつてゐて、暖爐には火の氣がなく、すべての調度も几帳面に取片づけられて、いかにも不用になつた室らしく寂しい感じがした。彼は暫くそこに突立つて、今女中から受取つた手紙をいぢくりながら、少し皺になつた封筒の文字を見つめてゐた。その文字は常より幾らか亂れてはゐるたけれど、なつかしい母親の筆跡にちがひなかつた。

窓にはすつかり窓掛をおろしてあつたが、その隙間から、女中が隣りの室で忙しげに食卓の仕度をしてゐる聲音が聞えた。

彼は封を切つて、読みはじめた。

可愛いジャンへ——

永のお別れをせねばならぬ時が、いよく／＼間近になつたやうです。わたしは恐れも、未練もなく、安心してこの世に暇をつけます。お前が一人前の男になつて、もう久しくわたしの補助なしに生活してゐるのを見ると、けたからです。わたしは、母親として最上の勤めをして來たと信じてゐるけれど、わたし達の間には、わたしがこれまで打ちあけかねた、一つの大きな祕密があります。

そしてそれは、是非お前に知つておいて貰はねばならぬことなのです。

お前が誰よりも尊敬してあんなに慕つてゐた母親、お前の幼少の時からあらゆる面倒を見てあげて、大人になつてからは親身の相談相手であつたお前の母親は、實は大變に重い罪を犯してゐるのです。何を隠さう、お前は自分で「お父さん」と呼んでゐる人の子ではありません。

わたしは一生にたつた一度、深く／＼戀に陥ちたことがあります。そして、そのことをこれまで告白しなかつたのが、わたしの一等わるい落度でした。お前の父親——ほんたうの父親はまだ生きてゐます。お前の成人するのを見まもつてゐて、そしてお前を愛してゐるのです。お前ももう一人前の男になつたのだから、今、人生の一大事を自分できめなければなりません。お前にその氣があれば、これからまつたく別の生活をすることも出来ません。わたしに缺けてゐた勇氣をお前が出してくれるなら、お前は明日からでも金持ちになれるのです。

わたしは今、卑劣なことをお前に勧めてゐる——それは自分にもよくわかつてゐるけれど、一生涯方針を誤つたわたしとしては、死ぬる間際にかうすることも已むを得ないのです。わたしはこれまで、寧ろお前をつれて此家を出ようと考へたことが幾度だつたか知れませんが、思ひきつてそれを實行することが出来ませんでした。お前のお父さんがわたしを疑るとか、吐り飛ばすと

か、さうした一寸したはずみがあつたら、わたしも家出をする勇氣が出たでせうけれど、お前のお父さんは只の一度もそんなことをなさらぬばかりでなく、お父さんのお心には一點の暗影もなかつたのです……

ジャンはふと読み方を止めた。思ひもかけぬこの告白で呆氣にとられたのであつた。

母は絶えずその良人を欺いてゐたのだ。長年の間虚偽の生活をやり通したのだ。彼女はこれつばかりも自分の秘密を、またそれについての悔恨を氣取られることなしに、談したり笑つたりして來たのであつた。

して見ると、世間の女のさうした罪を悉く憎んで、あらゆる誇りも歡びも尊敬もすべて「母親」といふ語のうちに概括してゐた彼れジャンは、この家で養育されたにも拘らず、實は一個の侵入者に外ならぬのであつた。そして彼は、いつも變らぬ親切と温情の權化だつた好人物の父親に對して、生きた侮辱であつたのだ。

彼は、幼少の記憶をはつきりと思ひうかべた。小さな子供だつた頃、父の手にぶら下つて街を歩いた自分の姿が眼に見えるやうだ。可成り大きくなつてから一度大病にかゝつて、何ヶ月かの間生死の境を彷徨うたときなんか、父が枕邊に坐つて、笑顔を見せようとしながら却つて涙ぐんでゐたのを

思ひだす。その後父は事業に失敗したが、その時分のことを思へば一層難有くなる。それは、ジャンが寢床へもぐりこんでから、ふと耳にした親達の會話なんだが、そのとき母は落ちつきはらつてゐたけれど、父はひどく亢奮してこんなことをいつた。

「おれはどうしても盛りかへして見せるぞ。煙草も禁めよう、カフェや俱樂部へも行くまい。服装だつておれは贅澤すぎる。とにかく子供には不自由をさせたかアないな。なアに、直きに樂になるさ。おれさへすべての方面に經濟をすれば、子供は感づくまい。小さい者は先きへ行つて苦勞せねばならないんだから、今から憂目を見せるといふことは餘りに残酷だよ」

かうした好人物を、母は欺いてゐたのであつた。

ジャンは椅子へ倒れて、両手に顔をうづめた。彼はたつた今讀んだ手紙の文句を思ひだした。「お前ももう一人前の男になつたのだから、今、人生の一大事を自分できめなければなりません。」と。

その通りだ。ぐづくしてゐる場合でない。金錢上の考へはまるつきり念頭にないが、母親に缺けた勇氣を奮ひおこすといふことが問題なのだ。

彼はいつそ何も云はずに此家を出て行きたいと思つた。二度と歸らぬ決心で何所か遠いところへ行つてしまひたかつた。さうするとこの恥辱が自分と、もに去るわけだ。かうした秘密を知つた以

上は、父親と食卓に向き合つて、「可愛い悴」と呼びかけ、「可憫さうなお母さんの思ひ出」を語る父の言葉をば、どうして顔を赤らめずに聞かれよう。

ジャンは屹然肚をきめた。けれどしくしく泣いてゐた。

「あゝ、お母さん、お母さん、あなたは何といふことをしたんです！……」

平和な家庭生活もこれを限りだ。神聖な記憶のかゝつてゐる家へ毎日歸つて來るといふ楽しみも、これつきりだ。虚偽をつゞけてゆくことは厭だし、それは許されることでもなかつた。

身じろきもしずに悲しい思ひにひたつてゐると、食堂の方で父の話し聲がする。

「可憫さうに、悴はひどく沈鬱でゐるやうだな。母親の室へ行つたのか、まアうつちやつておけ……何だか家の様子が變つて、おれも急に老けたやうな氣がする。でも悴がるるので大助かりさ。彼は優しい子だから、おれを見棄てはしないよ。」

ジャンはふと顔をあげたが、堅く唇を噛んでゐた。彼は父の話し聲を聞いてゐるうちに、考へが別の方向へ走つていつた。彼の決めた方針は可成り困難であるばかりでなく、それでは自分の義務が明瞭にならないやうな氣がして來た。

「おれを見棄てはしない……」

さういつて彼を信頼してゐる人——寂しく年老いてゆくこの可憫さうな人をば、このまゝ置き去りにすることが出来るものか。家出をするといふことが、果して、多年滄らぬこの父の恩愛と努力と克己に酬いる唯一の道であらうか。

しかし彼はこの父の子でない。してみると、此家の軒下にべんべんと止まつてゐるといふことはあまりに圖々しく、且つ容しがたいことなのだ。直ちに決心をしなければならぬ。ぐづぐづしたら後でどうすることも出来なくなるだらう。

ジャンは母親の手紙をしかと握つてゐた。彼はもう一度それに眼をやつた。

……お前のお父さんがわたしを疑るとか、叱り飛ばすとか、さうした一寸したはずみがあつたらわたしも家出をする勇氣が出たでせうけれど、お前のお父さんは只の一度もそんなことをなさらぬばかりでなく、お父さんのお心には一點の暗影もなかつたのです……

そのとき、食堂の方で再た父親の話し聲がした。

「うむ、おれは家内と二十七年も連れ添うたがな、彼女はまったく一點の暗影もない女だつたよ。」
恰度同じ語だ。同じ文句だ。

ジャンは手紙のつゞきを讀んだ。

それで、わたしは今こそお前のほんたうの父親の名前を打ちあけます。それは……
 恰度その頁の切れ目だつたが、ジャンはこゝまで讀むと、書簡紙が手先でぶる／＼とふるへた。一寸裏をかへせば、その男の名がジャンの眼に、いや心の奥底へ永久に鑄りつけられるだらう。さうするともう萬事休矣だ。

と、食堂の方から父の聲で、

「ジャンや、早く来ないと、御馳走が待ちくたびれてゐるぞ。」

ジャンは天を仰いで、一瞬間瞑目した。それからマッチをすつて手紙に火をつけた。彼はそれのするすると燃えてゆくのを見つめてゐるが、爪に火がつきさうになつたので、ぱつと指を離した。手紙は黒い、四角な灰になつて床へ落ちた。僅かに残つてゐた白い隅も直きに燃えてしまつた。もう何もない。

やがて食堂の戸口から覗いてみると、人の好い父親は、そこに突立つたなりで悴の來るのを待ちかねてゐた。

相變らず温情に充ちたやさしい顔をして、臉に涙を一杯ためて両手がかすかにふるへてゐる父親の容子を見ると、ジャンはいきなり飛んで行つて、幼い子供のやうな仕草でその曲りかけた肩へしがみ

ついた。

それは、この世で二度と逢へない骨肉に向つてするやうな熱烈な抱擁だつた。そして泣きじやくりでもしてゐるやうな涙聲で彼はいつた。

「お父さんだ、僕の大切な／＼お父さんだ。」

十時五十分の急行

「今日お發ちださうですね、ムツシウ。」
と跛の男が私に問ひかけた。

「あゝ、月曜の朝にマルセイユへついてゐないと、都合がわるいからね。十時五十分の急行でリオン停車場から發たうと思つてゐる。あの急行がいゝよ。だが鐵道のことは君の方が詳しいわけなんだね、君は病氣になる前までP・L・M（パリ・リオン・地中海鐵道會社）に勤てゐたさうだから。」
すると彼は眼を閉ぢたが、急に顔が蒼ざめて來て、

「えゝ、知つてゐますとも。知り過ぎるほど知つてゐます。」

眼瞼の下に涙さへうかべて、ちよつと黙りこんでから附け加へた。

「あの列車のことなら、私以上に詳しい者がありませんまい。」

もうその職業にかへれなくなつたことを悲觀してゐるらしいので、私は思はず同情していつた。

「面白い仕事だつたらうね。何しろ頭の要る結構な仕事だ。」

彼は身ぶるひした。不隨になつたその體がはげしく引きつり、そして眼には或る恐怖の色をうかべながら、

「大違ひですよ、ムツシウ。結構どころか、恐ろしい生命がけの仕事なんです。思ひだしてさへ慄然として壓されるくらゐです。餘計なおせつかいをするやうだが、あの列車だけはお止めなさい。他の列車ならどれにお乗りにならうと介意ひませんがね、あの十時五十分の急行だけはお止めなさい。」

「何故。私は笑ひながらいつた。君は迷信家なんだね。」

「迷信ぢやありませんが、千八百九十四年の七月二十四日の大慘事（たいさんじ）のときに、私は恰度あの列車を運轉してゐたのです。そのお話をするとよくお解りになりませう。」

その日、私は定刻にリオン停車場を發て、約三時間駛りました。馬鹿に熱くるしい日で、速力のはやいにも抱らず、汽鑪臺へ來る風が息づまるやうでした。それに大氣が妙に重く、蒸暑くて、今にもあらしがやつて來さうな氣勢でした。

空が、突然電燈を消したやうに眞暗になつて、星影一つありませんでした。月も隠れて、ときんく

凄^{すこ}い稻妻^{いなづま}がびかりと来たかと思ふと、そのあとがインキを流したやうな眞^{しん}の闇^{やみ}です。私は火夫^{くわふ}へ聲^{こゑ}をかけました。

「どうしたつて逃^{のが}れつこはないね。今^{いま}に豪雨^{ごうう}が来るぜ。」

「早く降^ふればいゝ。かう蒸^ひされちや遣^やりきれたもんぢやない。だがこんな晩^{ばん}には、シグナルをしつかり睨^{にら}んでゐないと危^{あぶ}いですよ。」

「大丈夫^{だいぢゆうぶ}だ、はつきり見えるよ。」

雷鳴^{らいめい}がひどいので、車輪^{しゃりん}の響^{ひび}きも排汽^{はいき}の音^{おと}も聞^きえませんが、雨^{あめ}はまだ降^ふらないけれど、あらしがだんだん近づ^{ちか}づいてゐました。いや、私達^{わたしたち}は眞直^{まっすぐ}にあらしの方^{ほう}へ突進^{とっしん}してゐるのです。まるで、あらしを追^おかけてゐる恰好^{かっかう}でした。

狂人^{きやうび}のやうに突駛^{とつし}してゐる鋼鐵^{かうてつ}の怪物^{くわいぶつ}に乗^のつて、大あらしの眞只中^{まっただなか}へ投^なげこまれたとき、少しは變^{へん}な氣^きがしたつて、決^{ひつ}して臆病^{おくびやう}といふことは出來^できますまい。

直^すぐ眼^めの前^{まへ}で、稻妻^{いなづま}が大地^{だいち}をつん裂^ずいたかと思ふと、雷鳴^{らいめい}がぐわら／＼とやつて來^きました。それが續^つげざまで、餘^{あま}りに凄^{すこ}いものだから、私^{わたし}は思^{おも}はず眼^めをつぶつて、がつくりと膝^{ひざ}を折^ひりました。數秒^{すうびょう}間^{かん}さうしてゐるうち突^{とつ}然^{ぜん}に耳^{みみ}がぐわんと鳴^なつて、頸筋^{くびすぢ}を強^しか打^うたれたと思^{おも}つたら、それつきり

氣絶^{きぜつ}してしまひました。

やがて正氣^{しやうき}にかへつたときは、まだ膝^{ひざ}まづいて、汽罐臺^{きかんたい}の仕切^{しきり}へぐつたりと倚^よりかゝつてゐました。何^{なん}だか百マイルも驅^かけて來^きたやうな感^{かん}じがしました。

起^たちあがらうとしたけれど、駄目^{だめ}です。折^せれ曲^まつた兩脚^{りやうあし}がもう利^きかなくなつてゐます。轉^{ころ}ぶ拍子^{ひやうし}に何處^{どこ}ぞ挫^くいたのでせう。そのくせ痛^{いた}くも何^{なん}ともないが、手^てを突張^{とつ}つて起^お上^ありたくも、兩方^{りやうほう}の腕^{うで}がだらりとぶら垂^かつてゐます。

私^{わたし}は異樣^{いやう}な感^{かん}じに囚^{とら}はれて、たゞ呆然^{ほうぜん}としてゐました。手^てや脚^{あし}が他人^{たにん}のものゝやうで、もはや自由^{じゆう}がきかないばかりでなく、まるで風^{かぜ}に吹^ふきまくられてゐる私^{わたし}の作業服^{さぎふく}同様^{どうよう}、生命^{いのち}のないものになつてしまつて、それに私^{わたし}は、えたいの知^しれぬ或^{ある}る力^{ちから}に壓迫^{あつぱく}されてゐるやうで、眼^めを開^あけることすらも出來^できませんでした。

列車^{れつしや}は最大速度^{さいだいきそりよく}で駛^はつてゐました。あらしはなほ暴^あれ狂^{くる}うてゐるが、そのときは少^{すこ}しく穩^{おだ}かになつて遠^{とほ}のいたやうでした。その代^かり雨^{あめ}が降^ふりだしました。鋼鐵^{かうてつ}にしぶきの碎^{くだ}ける音^{おと}がして、顔^{かほ}に溫^{あつ}い雨粒^{あめつぶ}を感じ^{かん}じました。

私^{わたし}は突^{とつ}然^{ぜん}に身内^{みうち}が弛^{ゆる}んだやうになつて、少^{すこ}し疲^{つか}れてゐながら、氣分^{きぶん}ははつきりして來^きました。その

場所と、仕事のことには気づくと同時に、ハッと現実にかへりました。何事が起つて、何故体が痙攣つたかは呑込めないが、とにかく自分ちや起てさうもないので、抱き起して貰はうと思つて火夫を呼びました。

が、返事がありません。

全速力が出てゐるときは、汽鐘臺の音響がはげしいものですから、私は聲を張りあげました。

「フランソア。おい、フランソア、手を貸してくれ。」

やはり返事がない。と、私は何といつていゝかわからないが、眼を開けると同時に或る恐ろしい懸念でアッと叫びました。正しく恐怖の叫びで、しかもそれには十分の理由がありました。

汽鐘臺が空つほで、火夫の姿が見えないのです。

はつと思つた瞬間に、はつきりと了解めました。われ／＼は落雷にうたれたので、火夫は即死して線路に墜落し、私はそのまゝ、體が痺れてしまつたに違ひないのです。

いや、逆も、ムツシウ。假りに私が大學者であつて、どんな語を列ねたからつて、あのときの恐怖を適切に云ひ現はすことは出来ません。私を補助ける役目である火夫が魔法にでもかゝつたやうに消えて失くなり、私の背後には、二百名からの旅客が、狂速力で確實に死の方へ驀進してゐるといふ

ことを夢にも知らずに、平和に眠つたり談したりしてゐる。しかも、その列車の機關士たる私はもう全身不隨で、腕が自由を失つてゐるので、何として見やうもないのです。

私は體の利かなくせに、頭が鋭敏に働いて來ました。まづ、行く手につゞいてゐる線路がはつきりと見える。列車は、月光にきら／＼するその線路の上を非常な速力で突進してゐます。私は平生痲痺してゐた速力の感じが、そのとき急に鋭くなりました。

列車が或る小さな驛を電光のごとく通過した瞬間に、私は、信號手が哨舎の中で、電號機の傍に居眠りをしてゐるのをちらと認めました。と、車體が轉車臺の上で一二度揺ぶれ、鋼鐵板がガツタンガツタン鳴つて、縦横に交錯した線路が急に廣くなつたり狭まつたりして、或る切通し線へ入つたと思ふと、また闇の中を駛りはじめました。

間もなくトンネルへさしかゝると、列車はまるで猛り狂うた疾風のごとくその中へ突入したが、忽ちそこを突きぬけて、再びひらけた線路へ出ました。ところがその時です、私が、列車が何の地點を駛つてゐるかといふことに気づいたのは。そして到底脱線の外はないとあきらめました。二分後には急カーヴへかゝる筈で、しかもその狂ほしい速力では、どうしたつて其處で轉覆を免かれなかつたのです。

ところが天祐でしたね。その急カーヴで機関車が全列車諸ともに傾斜すると、レールが車輪の方へ猛烈に盛り上つたものだから、案外にも無事にそこを通過しました。

第一の懸念だつたこの急カーヴを無難に通過したので、私はほつとしました。あとは、燃料の缺乏で火が消えると、機関がひとりで止まるだらう。さうすると車掌が機籠臺の方へ様子を見に来る。私が詳しく事情を話せば、車掌は列車の後前へ濃霧信号を出してくれる。それでわれ々は救はれるわけです。

だが、さうした氣休めは長くつきませんでした。やがてもう一つの驛を通過したが、そのときこそ慄然としました。そこに停車信号が掲つてゐるのが見えて、しかも私の列車がその故障線へ飛込んでしまつたのです。

そのとき私が發狂しなかつたのが、不思議なくらゐります。一時間七十マイルといふ狂速度で驛進してゐるとき、行く手に故障があると知つた機關士の心持をお察し下さい。

私は自分にいひました。「今停車しなければ、おればかりでなく、全列車が粉微塵だ。その恐ろしい事故を防ぐために、おれは一寸した動作をすればいい。僅か二呎前に見えてゐる横杆を握りさへすればいいのだ。しかしおれにはそれだけの簡単な動作も出来やしない。ちつとして災難を見てゐなければ

ばならぬ。それが死より百倍も辛いことだ。衝突の對象物が目の前に、次第に大きくなつて来るのを見つめながら、それに向つて驛進するこの苦痛——」

私は眼をつぶらうとしたけれど駄目でした。で、我れにもあらず行く手を見据ゑてゐました。私はすべてを見ました。障碍物の現はれぬ前から、その何であるかを察しました。果して推測どほり、その線を塞いでゐたのは破損した列車でした。その眞黒な影と後燈が見えてゐました。私の列車はそれに向つてぐんぐん近づいて行く。刻々に迫つて行く。私は聲を限りに叫びました。

「助けてくれい、止めてくれい。」

しかし誰に聞えませう？ 間隔がぐんぐん減つて行きます。私は感覺のほかは死人も同様だつたのです。生きてゐる部分といへば、夜闇の中であらゆる物の見える不氣味な視力と、轟々たる車輪の響きにも拘らずあらゆる物音の聞える耳と、もう一つ、總崩れの味方を盛りかへすべく必死に號令する大將のやうに怒鳴りつけてゐる、狂ほしい意思があるばかりでした。

障碍物は急速に接近しました……五百ヤード……三百ヤード……人影が慌だしく線路を駆け廻る……たつた百ヤード……アツといふ間に、もうお終ひ……轟然たる音響……死屍壘々……壊滅！
その惨状は、現場を見た人でなければ逆もわかりません。

私は正氣にかへつたときは、崩れた車臺の下敷になつてゐました。苦しさに救ひを求めると叫び聲が空に充ちくくして、カンテラを提げた人や、怪我人を抱へた人が右往左往に馳せちがつてゐました。さうして夥しい叫喚と、呻吟と、哀泣。

私はそれ等のすべてを目に見、耳に聞きながら、たゞ呆然としてゐました。考へる力を失つたので、勿論救けを呼びもしませんでした。

しかも私はそのとき、唇に觸れるほど近く頭上におつかぶさつた二枚の板片の間から、ほつちりと靜かに澄みきつた蒼穹を眺めてゐました。そして不思議なことに、その蒼穹に小さな美しい星が一つきらくとふるへてゐるのを見て、爽やかな氣持がしたのを覚えてゐます。」

ピストルの蠱惑

一時間前までおれは囚人だつた。しかも大變な囚人だ。外聞だの刑期だのといふ問題ではなく、すんでのことに、この首が飛ぶところであつたのだ。

斬首臺を夢に見て魔されたことも幾度だかしない。そんなときは思はずぞつとして、もしやあの庖丁の細い刃の痕がついてゐるはせぬかと、冷汗の滲んだねばくする手で、そつと頸筋を撫でてみるのだつた。彌次馬の立騒ぐ聲までも聞えるやうな氣がして、ぶる／＼と身ふるひがした。「死刑にしろ、死刑にしろ。」といふ呟れた叫び聲が耳底でが／＼鳴つた。

しかし今はすべてが終つた。おれは釋放されて、自分の住室へ歸つて來たのだ。そしてもう一度市街の雜鬧や、店屋の明るい電飾が見られる軀になつたのである。今夜は久しぶりにゆつくりと晩餐を使はう。暖爐のそばで好きな煙草も喫めるし、それに、暖かい自分の寢床でう／＼と眠れるのだ。

だが、おれはかうして辛と無罪放免になつたばかりなのに、今この瞬間ほど、自分を痛切に罪人だと感じたことはない。

裁判官がどう踏みちがへて、おれの正體が捉めなかつたのか、不思議でたまらない。おれは徹底的にあらゆる事實を否定することに熱中しつゝけたので、頭がぼうつとしてしまつた。もう少し頭がはつきりして來たら、是非とも事の真相を書かねばならぬ。おれはこの眞實をば、過去三ヶ月の間、巧みに且つ意地わるく隠しとほして、終ひには、殆んど自分の嘘を自分で信するくらゐまで潜ぎつたのであつた。

ところが何を隠さう、おれが殺人者なんだ。あの女を殺したのは、このおれなんだ。

何故殺す氣になつたのか。だれにもわからない。何だつてあんなことを仕出來したのか、自分にもまるで合點がゆかぬ。

おれはあの女に惚れてゐたのではないから、嫉妬が原因でないことは確かだ。といつて物盗りのためでもなかつた。裕福なおれは、彼女の屍體から發見された數フランの金なんか目くらむわけはないのだ。左ればといつて、憤怒の果に殺したのでもなかつた。

あのときおれ達兩人はこの室にゐたのであつた。彼女はあの鏡のそばに立つてゐたし、おれは恰度

今坐つてゐる場所に坐つてゐた。おれが本に讀みふけてゐると、彼女は話しかけた。

「外へ出ませうよ。ボア公園へ散歩に出かけようぢやありませんか。」

「僕は疲れてゐるから駄目だ。家にゐる方がいゝ。」

とおれは顔もあけずに拒ねつけた。

彼女は行かうとせがんだけれど、おれはどこまでも厭だと頑張つた。それでも執拗くせがむので、おれはその聲が癪にさはつて來た。彼女はいかにも腹立たしうな物のいひ方をして、おれの不精を皮肉つたり、冷笑したり、輕蔑して肩をゆすぶつたりした。

おれは數回彼女を黙らせようとした。

「靜かにしてくれないか。頼むから靜かにしてくれ。」

だが、女は平氣で饒舌をつゞけた。おれは起ちあがつて室の中を歩きはじめた。さうして歩き廻つてゐるうちに、ふと暖爐棚の上に、小型のピストルが載つてゐるのが眼に止まつた。それは、おれが夜分いつでも衣囊へ入れておくピストルなのだ。

おれは機械的にそのピストルを手を取つたが、その瞬間に一種の變な氣持に囚はれた。

まだがみ／＼いつてゐる情婦の聲が、何とも形容の出來ない程度にまでおれを焦々させた。しかし

癩にさはつたのは、口汚ない文句ではなくて聲であつた。さうだ、あの聲だ。あの場合彼女がよしんば意味のない言葉をしゃべくつてゐたとしても、或は美しくい詩を朗讀してゐたとしても、おれはまつたく同一の憤りを感じたにちがひない。

おれは靜かにしてゐたかつた。ひたすらに完全な休息が欲しいのであつた。しかし何故、どうしておれの心がさうした沈黙に對する己みがたい欲求と結びついたのか。またその欲求が、手にもつたピストルと何うして結びついたのか。おれにもわからない。何でもおれはその兇器を振りまはしてゐるうちに、ふと引金をひいたと思ふと、女が聲も立てずに斃れてしまつたのだ。おれの覺えてゐるのはそれだけだ。

いつたい咄嗟に人を殺したいといふやうな考へは、ほんの氣まぐれな幻想に過ぎないもので、胸にひらめくが早いか直ぐに消えてしまふものだが、あの時に限つて、その奇怪な幻想が心にこびりついて、恰度真綿の中へギザ／＼な爪を突こんだやうに、焦れば焦るほど搦みつくのであつた。

おれはピストルを卓子の上においた。が、どうしてもそれを見ずにはゐられない。顔を背けようとするけれど、視線はおれの前からあつた。象牙の柄がついて銃身のきら／＼する奴がおれの前にあつた。ピストルはおれの前にあつた。象牙の柄がついて銃身のきら／＼する奴がおれの前にあつた。

おれは二三度手をのべたり引こめたりしたが、欲望は結局意思よりも強かつた。おれはどうしてもその物に手を觸れ、それを攫まねばならなかつた。

われ／＼が或る種の危険に直面したときに襲ひかゝる誘惑といふものは、實に不可解なものだ。おれは今でも記憶えてゐるが、或る日ビュット・シヨームン公園へ遊びに出かけて、俗に「自殺者の橋」と呼ばれてゐるところへさしかゝると、おれは一生懸命にその欄干にしがみついた。さうしないと、自分で不意に跳び込みさうで、危くして仕様がなかつたのである。また汽車に乗つて、一つの車室に自分一人つきりのことも數回あつたが、そんなときは、警報器が引きたくて狂氣になりさうだつた。あの警報器にぶら垂つてゐるニツケルの握り玉がおれを誘惑するのだ。それは「どうぞ私を引いて下さい。」とせがんでゐるやうに見えた。さういふことは途方もない行爲で、罰を喰ふか、多額の科料を課せられると知りながら、どうしても制しきれないのだ。だが幸ひなことに、そんなときいつも偶然にその列車が停車したり、他の列車とすれちがつたりして考へを外らしてくれたから助かつたやうなものゝ、左もなければ、おれはきつとあの誘惑に屈伏しただらう。

さて事件のあつたあの晩にも、今いつたやうな抵抗しがたい衝動に驅られたのである。おれの手も眼も、もはや意思どほりにはならなくなつてゐた。おれはまるで他人のやうに自分自身を眺め、そし

て結果がどうならうとも、自分の行動に盲従する外はなかつた。

そのとき、女はまだ饒舌つてゐたのであつたか、それとも沈黙してゐたかは判然しないが、何でも、おれはビストルを持つたまゝつかくと女の方へ行つて、手首を彼女の額の高さにまであけて引金をひくと、鞭鳴りのやうな鋭い音がして、女の右の眼の下に、ほつちりとごく小さな赤いマークが出来た。と思ふと、彼女はまるで紐がとけた袴のやうに、へな／＼と床に崩折れてしまつた。おれの覺えてゐるのはそれだけで、あとは夢中だつた。

やがてはつとして正氣にかへると、狂ほしい恐怖がおれを支配した。おれは狂人のやうに室中を駆けまはつた。そして犠牲者を見ようともしないで、或る臆病な本能から、戸をあけるが早いかな、

「大變だ、自殺だ。」

と叫びながら階段を駆けおりた。

最初人々は、女がまつたく自殺したものと信じた。が、後に専門家が調べて、自殺にしては甚だ怪しいといふことを發見すると同時に、おれは逮捕された。さアそれから裁判が長びいた。おれが一言「何も申し上げることがありません。」

の一點張りで押し通した。ところが裁判官なんてものは、晩かれ早かれ、何かしら動機を見附けだして犯行を解釋してくれるものなので、おれはいゝ鹽梅に釋放されたのである。

おれは今すべてを冷靜に批判すると、虚偽の供述を押し通したことが必ずしも悪いといへないやうな氣がする。よしんば、今こゝに書いてゐる通りに申し立てたとしても、陪審官達は果しておれを信じただらうか。無罪にしてくれただらうか。おれはやはり頑張つていゝことをしたと思ふ。變な風にとると、眞實だつて嘘と見られることが幾らもあるんだから。

あゝ、おれはもう自由な體になつて、こんな難有いことはない。何處へでも勝手に出歩くことが出来るのだ。

窓から街が見える。人家も、青い樹木も見えてゐる。

あの騒ぎを起したのは、恰度この室だ。人々はもうおれを此室には住まはせまいとしたけれど、おれはどこまでも頑張つて歸つて來たのだ。おれは幽霊なんか恐れはしない。それにこの告白書だつて他で書くよりも此室で書く方がいゝんだ。何でも過去の事件は、その起つた場所へ行けばもつとも如實に思ひだせるものなのだ。

とにかく、この告白書によつておれの心はすっかり解放された。魂ひが洗つたやうにきれいな

つた。

この上は、今まで取憑いてゐた夢魔を忘れるやうに心掛けよう。おれは、何處ぞ巴里から懸隔れた田舎に隠れて暮さう。世間は直きにおれの姓名すらも忘れるだらう。おれはすつかり別人になつて、新たに百姓になりきつて生活しよう。そして今までの自分といふものを全然忘れてしまはう。

さてこゝに一つ、何を措いても處分せねばならぬ品物がある。それは、今朝法廷で下戻されたこのピストルだ。どうも此品がさまざまなことを厭にはつきりと思ひださせるので困る。早速これを處分しよう。武器の要るときはまた他のピストルを買へばいゝんだ。

ピストルは今おれが書きものをしてゐる傍にころがつてゐるんだが、こいつを見ると腹が立つ。だが何て小さなピストルだらう。綺麗なものだ。まるで玩具か裝飾品のやうだ。これが害になるとはどうしたつて思へない。

おれは今そのピストルを手に取つた。ごく軽くて、滑々して、いゝ手觸りだ。冷やりとして……少し氣味がわるい……何だか神祕な感じのするこの眠つてゐる兇器は、短刀なんかとちがつて、危険が外に顯はれてゐない。短刀なら鋭利な刃をみても、切先に觸つてもすぐにその危険がわかるのだ。それでピストルは使はうと思へばすぐにも……だから、おれはこんなものを持つてはいけな

いんだ……明日早速賣りとばさう……それよりも無代で呉れてやらう……いやそれも可かん。いつそ捨てゝしまはう。

だが、なぜ捨てねばならぬのか。おれはあまり熱心に見つめるから悪いのだ。暫く見ないでゐたらいゝではないか。しかしどうも見ずにはゐられない。それは黙せる證人のやうに、そこに横はつてゐる。まつたく厭なもんだ。すぐに處分してしまはう。

おれはかうして書きつゞけてゐるが、ピストルは依然としておれの前に横はつてゐる。

自殺をする奴等は、きつとこんな風に坐つて、最後の願望を書き遺すにちがひない。そのときの心持はどんなだらう。おれは判然とわかるやうな氣がする。初めは誰だつてピストルを真正面に見る勇氣もあるまいが、一度決心がつくと、おそらくそのピストルから眼が離せなくなつて、魅せられたやうにちつとそれを見つめるだらう。

いつたい自殺なんて、そんなに勇氣が要るものか知ら。

一等辛いことは——動作は簡單だが、かう手をのべてピストルを握れば、鐵の肌が冷々として——いや、何ともありやしない、おれは今、ピストルを左手に握つてゐるんだ……銃身をかう顛頭へあてる……この感じは決してわるいものぢやない……少し冷りとするだけだ……が、鋼鐵は肌の温もり

で生温くなつて来る……

いや、これが一等恐ろしい瞬間ではあるまい……辛いことは何といつたつて、引金をひく刹那だ

う……それは、魂ひがこの肉體を離れようといふ最後の時なんだから。

しかしそれだつて分るもんか……案外平氣かも知れんぞ……一度魔力にかゝると、否應なしにする
ずると誘ひこまれるものだ。

その氣持がはつきりとわかる……おれは何だか、この世のものでないやうな氣がして来た……もう
何の感覺もない……えたいの知れない者がおれを呼んでゐる……あゝ其奴がおれを引きずりこんでお
れを押しつゝんでしまつた……おれは今引金をひく……

二人の母親

「坊ちゃん、いくつ？」

通りがりの老紳士が問ひかけると、

「四つ。」

砂いぢりに夢中になつてゐた男の子が答へた。

「名前は何ていふの。」

「ジャン。」

「苗字は？」

「ジャン。」

「それだけぢや、わからないね。」老紳士は莞爾して、「ジャンといふ名前の子供は澤山ゐるからね。お

と思ひます。さうしてゐるうちに病院でも持てあまして、赤ん坊を寧ろ孤兒院へやつてしまはうといふ話をはじめりました。

さアそれを聞くとわたし達はびつくりして、たつた一ト目でいゝから見せて下さい、觸らせて下さい、キスをさせて下さい……そして最後には、何がどうあらうとも、わたし達の傍へおいて下さいと歎願しました。それで、赤ん坊は結局わたし達の手に残されることになりました。

赤ん坊は、初めは只もう、ぎやア〜泣いてばかりゐました。やがて欄の中へ入れると、きよろきよろわたし達兩女の顔を見てゐるやうでした。赤ん坊はそのときまだ判然と眼が利きはしませんが、わたし達の思ひ倣してそんな風に見えたのです。とにかく、赤ん坊が大變幸福さうに見えたものですから、わたし達兩女もやつと安心して、お互ひに口を利くやうになりました……尤も、初めはごく慎重しく「難有うございます、奥様。」とか「御免あそばせ、奥様。」といったやうな風でしたが、だんだん赤ん坊の話になりますと、自分の子供のことをいつてゐるやうな調子で、親身に語り合ひました。床上げをした日に、お互ひに容貌を見合つて、年齢をくらべてみました。何方もめつきり老けたやうでした。結局、わたし達はもう、世間の女のやうにはなれないといふことを悟りましたので、赤ん坊を兩女の所有にして育て、ゆかうと相談しました。それで、あの子は彼女とわたしの共同の子供

なのです。出産證明書にも「父不明——母不明」と記入されてゐます。

わたし達は、子供をつれて病院を出ますと、共同で一つの部屋を借りて住まふことになりました。わたし達は今は同じ勤め先に働いてゐますが、一人は子供のお守りをしなければなりませんので、交代で一日おきに出勤してゐます。子供は兩女に同じやうに懐いてゐて、よくいふことをきゝます。わたし達も、今はそれを不自然と思はぬやうになりました。子供は何も知らずに、一つのキスの代りに二つのキスをうけてゐます。あの子は幸福でございます。」

『それで、あなた方はどうですかね。』

『わたし達は、女は兩手を堅く握つて、溜息をつきながら、「お察し下さい、貴方。お互ひに口へ出してはいひませんが、それはもう、しよつちゆう、あの小さな顔の中に何か昔の思ひ出がありはせぬかと探してゐます。どうかすると突然に「この眼は良人の眼付に似てゐる。口元といひ、頭の恰好といひ、そつくりだ。」そんなやうな想像に囚はれることがあります。夜寢床へ入つてからも、彼が誰の子か永久にわかりさうもないのを、ひそかに歎きます。もつともそれが判明すると、却つて恐ろしいことかも知れません。そしてあの子がもつと大きくなつたら、何ぞ新しい證據——例へば聲とか性癖とか、動作とか、死んだ良人の血をうけてゐる争はれない證據が出て來はせぬかと、待ちまうけてゐる

臺のすぐ傍で破裂したものですから、それはひどい騒ぎでございました。産科病院では、お産がありますとすぐに、母親の寢臺の番號を書いたものを赤ん坊の腕へまきつけることになつてゐます。さうしませんと、生れたての赤ん坊は大いと同じで、見わけがつかなくなるからです。ところがわたし達の場合は、今申したやうに、お産の後始末もつかないうちに砲彈が破裂して、それがために、其處にゐた産婆と生れた赤ん坊の一人が即死してしまつたのです。わたしたち産婦は二人とも氣が遠くなつてゐたものですから、痛みも疲れも夢中で、敵彈が破裂したことは微かに覚えてゐますけれど、その恐ろしい實況はまるつきり知りませんでした。病院では、今にも天井が陥ちさうになつたので、大急ぎでわたし達を安全な場所へ搬びだしてくれたさうですが、わたし達が正氣にかへつたときは、赤ん坊は一人つきりで、しかも腕に番號がついてゐないものですから、わたしの子か、それとももう一人の産婦の子か、誰にもわかりません。わたしの赤ん坊は、たしかに右の方の欄の中に寝かしてあつて、砲彈は左の方で破裂したんですから、死ぬるわけがないと思ひますが、もう一人の産婦も同じやうなことを云ひ張るので、結局わけがわからなくなつてしまひました。何分にも主任の産婆が即死してしまつたので、外の看護婦達には實際の事情がわかりませんでした。

わたし達はそれについて訊問をうけましたが、證據となるべきものは何もありません。それはもう赤ん坊はわたしの子にちがひないので。わたしは堅く信じてゐます。けれど、信ずるといふだけでは證據になりません。もう一人の産婦も、やはりわたしと同じやうに信じてゐるのです。

その當座、わたし達は夜も晝も泣きの涙で暮らしました。それにもう一つ悲しいことには、わたし達はそのとき、二人とも寡婦になつてゐました。何方も、良人が戦争に出て戦死したのです。それで頼りになるのは子供だけなのでございますから、わたし達は、死んだ赤ん坊が可憫さうだといつては泣き、生き残つた赤ん坊が判らないといつては泣きました。

彼女は涙をふいて、

「ジャンや、遠くへ行くんぢやないよ。そこに遊んでおいで、いゝ子だね。」

子供の方へ聲をかけたが、またそゝろに遣る瀬ない氣持になつて、話のつゞきを語つた。

「わたし達二人の産婦は知らない仲でしたから、碌々談話もしませんでした。お互ひに何か盗まれたやうな氣がして、睨み合つてゐたのです。看護婦は、わたし達が自暴になつて無分別な眞似でもしはしないかといふ心配から、成るだけわたし達に赤ん坊を抱かせないやうにしました。實際、わたし達はどんなことでもしかねないやうな荒んだ氣持になつてゐたので、看護婦が要心したのも無理がない

と思ひます。さうしてゐるうちに病院でも持てあまして、赤ん坊を寧ろ孤兒院へやつてしまはうといふ話をはじめました。

「さアそれを聞くとわたし達はびつくりして、たつた一目でいゝから見せて下さい、觸らせて下さい、キスをさせて下さい……そして最後には、何がどうあらうとも、わたし達の傍へおいて下さいと歎願しました。それで、赤ん坊は結局わたし達の手に残されることになりました。」

赤ん坊は、初めは只もう、ぎやア〜泣いてばかりゐました。やがて欄の中へ入れると、きよろきよろわたし達兩女の顔を見てゐるやうでした。赤ん坊はそのときまだ判然と眼が利きはしませんが、わたし達の思ひ倣しでそんな風に見えたのです。とにかく、赤ん坊が大變幸福さうに見えたものですから、わたし達兩女もやつと安心して、お互ひに口を利くやうになりました……尤も、初めはごく慎ましく「難有うございます、奥様。」とか「御免あそばせ、奥様。」といったやうな風でしたが、だんだん赤ん坊の話になりますと、自分の子供のことをいつてゐるやうな調子で、親身に語り合ひました。床上げをした日に、お互ひに容貌を見合つて、年齢をくらべてみました。何方もめつきり老けたやうでした。結局、わたし達はもう、世間の女のやうにはなれないといふことを悟りましたので、赤ん坊を兩女の所有にして育て、ゆかうと相談しました。それで、あの子は彼女とわたしの共同の子供

なのです。出産證明書にも「父不明——母不明」と記入されてゐます。

わたし達は、子供をつれて病院を出ますと、共同で一つの部屋を借りて住まふことになりました。わたし達は今は同じ勤め先に働いてゐますが、一人は子供のお守りをしなければなりませんので、交代で一日おきに出勤してゐます。子供は兩女に同じやうに懐いてゐて、よくいふことをきゝます。わたし達も、今はそれを不自然と思はぬやうになりました。子供は何も知らずに、一つのキスの代りに二つのキスをうけてゐます。あの子は幸福でございます。」

「それで、あなた方はどうですかね。」

「わたし達は、女は兩手を堅く握つて、溜息をつきながら、「お察し下さい、貴方。お互ひに口へ出してはいひませんが、それはもう、しよつちゆう、あの小さな顔の中に何か昔の思ひ出がありはせぬかと探してゐます。どうかすると突然に「この眼は良人の眼付に似てゐる。口元といひ、頭の恰好といひ、そつくりだ。」そんなやうな想像に囚はれることがあります。夜寢床へ入つてからも、彼が誰の子か永久にわかりさうもないのを、ひそかに歎きます。もつともそれが判明すると、却つて恐ろしいことかも知れません。そしてあの子がもつと大きくなつたら、何ぞ新しい證據——例へば聲とか性癖とか、動作とか、死んだ良人の血をうけてゐる争はれない證據が出て來はせぬかと、待ちまうけてゐる

ますけれど、よしんばさうした證據が出て来たつて、わたし達はお互ひに何も云ひだせないでせう。何故つて、兩女で育てゝみますと、彼子が可愛くてく、お互ひに手離せるものでもなし、片一方が獨り占めにするといふことも出来ないやうになつてしまつたのでございます。』

いつの間にか日が暮れかけて、四邊が仄ぐらくなつて来た。と、並木の向うからもう一人の女がやつて来た。彼女も打萎れた侘しさうな風をしてゐるが、その姿をちらと見ると前の女が子供の方へ聲をかけた。

『ジャンや、母ちゃんが歸つて来たよ。』

『さう、母ちゃん。』

子供は木製の玩具の鋤をもつて起ちあがつた。

それから、今来た女の方へとつとと驅けて行つて、

『お歸んなさい、母ちゃん。』

と活潑な聲でいつた。

やがて二人の女はその子を中心に挿んで、兩方から小さな手をひきながら公園を出て、彼等の住室の方へ歸つて行つた。

蕩兒ミロン

若くもなければ美人でもないあの女に、ミロンがどうしてあんなに惚せたのか、それは誰にもわからぬ謎であつた。

ミロンはそれ以來、親友にも疎くなり、始終彼を見かけた場所へも、ぼつたり顔を見せなくなつた。そればかりでなく、彼は藝術のためといふ眞摯な態度を棄てゝしまつて、下らない糊口的の繪を描きだした。

或るとき舊友の一人が彼を諫めた。

『君は馬鹿だな、ミロン。君はこの頃下らん仕事ばかりやつてゐるものだから、腕が荒ぶのだ、藝が墮落するんだ。』

するとミロンは肩を怒らして、

「馬鹿を云へ。」

とせよら笑つた。それでも友人はミロンのゆたかな天分を賞めて、彼が以前大いに畫壇に名を成さうと意氣込んでゐた時分のことを云ひだして飽くまで反省させようとする、ミロンはあべこべに向つ腹を立て、

「天分が何だい、盛名が何だい、笑はしやがらア。おれなんか、そんなものにあこがれてゐた時分はな、屋根裏にくすぶつて、一日一食しか食へなかつたんだ。そのくせ「彼奴はきつと大家になるぜ。」なんて人がいつてくれたもんさ。今は誰もそんなことをいふ奴がない代りに、飯はたらふく食つてゐるんだ。おれは暢氣で幸福だよ。素的に幸福だよ。」

かう云ひすて、さつさと行つてしまつた。だが、友人の姿が見えなくなると、彼はそこいらのカツエへ飛びこんで、空っぽになつた酒杯の前に、何時間もほんやりと考へこんでゐるのであつた。

ミロンは嘘をいつたのだ。彼は決して幸福ではなかつた。初めのうちは戀愛で夢中になつて、何もかも忘れてゐた。新生活に必要な金をこしらへるために、つまらない小品畫や新聞雑誌の挿繪などをむやみと描きなぐつた。が、あまり厭な氣持がするときは、

「なアに、おれだつて今に眞面目な製作をはじめるんだ。」

さう思つて僅かに自分を慰めた。しかし時が経つにつれて、その決心もおとろへて殆んど臆病になつた。今では胸のそこに憂鬱な悔恨がきざして來て、ひそかに自分の腑甲斐なさを恥ぢてゐるのだが、戀ゆゑにだん／＼深間へ引きずられてゆくのを、どうすることも出来なかつた。

そのうちに借金がどん／＼嵩んで來て、債權者からは責められる。それがために情婦と喧嘩がはじまる。そんなことで苦しまぎれに、彼はたうとう不正手形を振りだした。

初めどうにかして金をこしらへて、その手形を落すつもりであつたけれども、生憎仕拂日の前日になつても金の工面がつかないものだから、彼は途方にくれてつひに夜逃げをした。

人目につかぬやうに、まづ一人で出發した。情婦も後からやつて來る約束だつた。彼はその約束を信じきつてゐたので、その晩隠れ場所へつくと、殆んど何の煩悶もなくぐつすり眠こんだ。

翌くる日は女からの手紙を待ちわびてゐると、晩になつて「ユカレヌ」といふ簡単な電報が一本とどいただけであつた。

彼は茫然自失した。女がこんな電報を書くわけがないと思つたが、しかしよく考へると格別腹を立てることもなかつた。

「彼女が來ないのも無理がない。おれはお尋ね者なんだからなア。」

さう思つて、彼はあきらめた。

失戀の痛みとともに、理想に向つてひたすら精進した頃の自分をふりかへつて、今の墮落した姿にひき較べると、彼はまるで迷子になつた子供のやうにけつそりして、何ともいへない遣る瀬なさがこみあけて來るのであつた。いつそ巴里へ引返して、自首して、潔く刑罰をうけようかとも思つた。

彼は己れを恥ぢて涙におほれるほど泣いた。

自分のやうな男は、社會から葬られるのが當然である。けれども法廷、監獄——そんなことを考へるとさすがに氣おくれがした。巧みに踪跡をくらましてをれば、さうした恥辱から遁れることが出來さうにも思はれたからである。

しかし何故そんなことが氣になるのか。妻や、両親や、友人や、その他尊敬する人々に累を及ぼしてならぬ場合とか、有名な人物であつて名聲が惜しいといふ場合なら格別だが、無係累で無名の彼が何でそんなことを思ひ煩ふ必要があらう。

彼は一枚の新聞を取りあけて、何心なく讀んでゆくうちに、さつと顔色を變へた。「ミロン 畫伯の失踪」といふ大標題のもとに、長々しい記事が載てゐるではないか。

彼は幾度もその記事を読みかへした後で、ふと考へた。會計係が公金を拐帶したの、偽せ金使ひが

捕まつたのといふことは、毎日のやうに起る事件で、人が殆んど注意を拂ひはしない。それなのに、おれが夜逃げをしたことを世間が大問題にしてゐる。官憲はおれの行方を捜してゐる。そして新聞がこの記事に多くの紙面を割いたゞけ、それだけおれの天才は社會から認められてゐるのだ。してみると、おれは無名の一畫家ではない。いつの間にか問題にされていゝ人物になつてゐるのだ——

そこまで考へると、急に入監といふことが恐ろしくなつて來た。恥と、恐怖と、自尊心で懊惱煩悶した。それから彼は幾日かを室に閉ぢこもつて、もしや窓下へ警官がやつて來はせぬかと、路地を通る聲音にも氣をくばつた。新聞も毎日熱心に注意して讀んだ。

ところが「ミロン 畫伯失踪」の記事は、やがて一面から二面へ、二面から三面へと移されたが、彼の名がまつたく出ない日が二日つゞいて、その後三四度ちよつぱり餘聞のやうな雜報が載て、それつきりばつたりと杜絶してしまつた。もう彼の噂をする者もなく、警察でも捜査を止めたらしい。

彼は虎口をのがれた思ひがした。もう何處へでも出歩ける體になつた。漸とのことで自由を得たのである。

しかしそれにも拘はらず、彼は實に遣る瀬ない孤獨を感じた。

やがて貧苦がやつて來た。彼は仕事を探しはじめた。だが一體何をやつたらいいのか。油繪、挿繪

——いや迂潤りそんなものを描いたら大變だ。自分の畫風が看破されて、忽ち足がつくだらう。

けれども糊口のためには、何か仕事をやつて金を得なければならぬ。そこでまづ教師の口を探したけれど、駄目だった。何處か事務所へ勤めようとしても、身元證明書が得られぬのでそれも出来なんだ。それで已むを得ずあらゆる種類の端た仕事に働いた。恐ろしく憊な筋肉労働さへもやつた。服は破けて、汚點だらけになり、容貌はぢぢむさくなつて、髪にも髭にもめつきり白髪がふえた。

『おれはもう駄目だ。いつそ自殺をしよう。』

悲愴な決心をしたことも幾度だったか知れないが、いよくといふ時になるとさすがに氣おくれがした。

しかも心は絶えず昔をふりかへつて、あの小さな畫室で途方もなく大きな理想を蒸がいてゐた時分のことを思ひだすと、何となく胸の底から希望らしいものが頭をもたけて來るのであつた。

かうして歲月は流れて行つたが、どうにかして昔の自分に立ちかへるか、左もなくばもう一人の自分を創り出したいといふ、已みがたい欲求に囚はれるやうになつた。そこで彼は更に辛苦を重ねた。食ふものも食はずに、或るときは野天に寝たりして、零碎な金を蓄へはじめた。さうして一錢一錢と積んでゆくうちに、それが漸く少しばかり纏まつた額に達した。

と、不思議にも若々しい活氣が旺盛と盛りかへして來た。そこで彼は白壁にでも、卓子の隅にでも手當りしだいに繪を描きはじめた。さうなると、眼に入るものが悉く繪になつて見えるのであつた。そしてふところに百フランといふ金が溜まると、彼はいきなり汽車に乗りこんで、佛蘭西へ——パリへ歸つて來た。出奔してから十五年目で彼は歸つたのだ。

誰が彼を思ひださう。殆んど白髪になつた頭と、長い頤髯と、脊が弓なりに曲つた彼の姿を見て、誰が昔のミロンを認めよう。

彼は初め怖けて滅多に外出もしなかつたが、追々と大膽になつて來て、時たま美術店の前へ素見しに出かけたりした。その飾り窓に陳んでゐる繪の中には、彼の修業當時から有名だつた諸大家のほかに知らない新進大家の作もまじつてゐた。彼はそれらの繪をちつと見くらべてゐたが、會て自分の技倆を誇つたことのない男だけれど、そのとき初めて確信を得たものゝやうに、獨りごとをいつた。

『おれなら、もつと巧く描けるぞ。』

彼は早速畫布を一枚と、繪具と繪筆とを買つて來て、旅宿の室で描きはじめた。

まるで長患ひから癒りかけた患者のやうに、危つかしい手つきでふるへながら繪筆をはこんでゐたが、やがてそれが仕上がると、一日一杯その繪を眺めながら考へた。

「いつたい巧いのか、拙いのか。」

彼はその出来栄えについて判断に迷った。が、思ひきつてロリオと——いふ出鱈目な名前で落款をした。それからその繪を小販にかゝへて、或る美術店へ出かけて行つた。

「僕は繪師なんだがね、貧乏で困つてゐるので、繪を一枚買つてくれませんか。」

「誰方の御作ですか。」

「ほ、僕が描いたのです。」

「先生の御姓名は？」

「ロリオ。」

「へえ、お氣の毒ですが、只今は誰方のお断りしてをりますので。」

ミロンは蒼くなつた。そしてぐつと唾をのみこんで、畫布を突きつけながら、

「見るだけでもいゝから、見てくれたまへ。」

美術商はちらとその繪をのぞいて、つか／＼と前へ寄つて來たが、一目見るとびつくりして、

「うむ、これは偉い。」

とすぐに仲間の者を呼んで、

「おい、此繪を御覽。どうだい。」

仲間はその畫布を手にとつて眺めてゐたが、低聲で、

「拙かアないね。」

「拙くないどころか、素晴らしいもんだ。」

「その爺さんが描いたのかい。」

「さうだよ。」

二人は暖爐棚の前で繪に見入りながら、ひそ／＼話をはじめた。

「素的なもんだね、實に素的だ。」

「誰に似てゐるかわかるだらう。尤もこの方がずんと偉いんだがね。そら、あの小品にそつくりぢや

ないか、放蕩者のミロンのさ。」

戸口の隅のところでぐつと待つてゐたミロンは、それを聞くと起ちあがつて、

「な、何だつて？」

「いや、放蕩者といつたのは、先生のことぢやありません。美術商は笑ひながら「今、繪のお噂をしてゐるんですがね、先生の繪はミロンといふ畫家の作によく似てゐますよ。」

「え、ミロンに似てゐるかね、ミロンに。」

彼は不思議さうに自分の本名をくりかへした。

「え、此店にもミロンの小品が一つありますがね、先生はあの畫家を御存じないんでせう。」

「知つてるよ。」

「先生の繪は筆法といひ、畫趣といひ、ミロンにそっくりですよ。もつとも先生の方がずっと巧いんです。商賣柄こんなことを正直にいつちや可けませんかね。」

「いや、僕のが好いといふこともないさ。」

とミロンは店先に懸つてゐるその小品の方へ眼をうつしながら、いつた。

「どういたしまして、先生は立派に腕が出来てゐらつしやるけれど、ミロンなんかは、たゞ器用に描きなくつたといふだけのもんです。較べものになりやしません。ですから先生、どんくお描きになつて私共へもつていらつしやい。先生の御作なら何枚でもお引受けして、片つ端から捌いてお目にかけます。それで二ヶ月もしたら人が先生の繪に目をつけはじめます。そして二年の後には一流の大家です。そのときはミロンなんか世間から忘れられてしまひますよ。」

ミロンは聞いてゐるうちに、顔が蒼ざめた。昔ならさうした譏辭を喜んででもあらうが、今の彼に

とつては、それは苦痛の種であつた。彼が心ひそかに愛慕してゐたのは、ミロンといふ昔の自分に外ならなかつた。わが身でありながら二度と名乗ることの出来ないミロンが戀しいのであつた。ロリオなんて奴が成功しようと、名を擧げようと、彼にとつて何の意義があらう。ロリオは彼の本名でない。否、ロリオといふ者は彼の本尊であるミロンを蹴落さうとする赤の他人で、しかもそのミロンといふ名を永久に抹殺しようとしてゐる恐ろしい競争者なのだ。

美術商はなほどくと巧い話をつけたが、ミロンはもう聞きともなかつた。てんで耳を傾けてもゐなんだ。彼は想像した——客がミロンの繪を買ひに来ると、この男はロリオの繪をば客の前へ突きだしてしたり顔にいふだらう。

「ミロンなんかよりもずつと好いのがあります。まア御覽なすつて下さい。」

ミロンはそれを思ふと堪らなかつた。彼は恰かも果敢なく失つた戀を歎くやうな心持で、自分自身を吊つた。

「ところで先生、いか程御入用なんですか。」

訊かれて、ミロンは悲しげに眼をあけたが、相手の言葉が呑みこめないやうな風であつた。

「御承知のとほり、初めつから十分の報酬を差あけるといふことは出来ません。半年や一年の間は、

何といつても情勢でミロンの方がロリオよりも賣れませう。新しい作家のを賣りださうとすれば、顧客に對しても當分の間宣傳といふことが必要なんですからね。その代りにその後はもう、ミロンなんか影も形もなくなつてしまひますよ。」

畫家は相變らず黙りこんでゐた。美術商は、報酬が少いから相手が躊躇つてゐるのだらうと推量したので、

「それでは、うんと奮發して……」

といひかけると、ミロンは手をふつて、

「いや、僕は時機を待たう。また來るよ。」

「左様ですか。でも繪はおいて行つて下さい。飾り窓の目立つところへ、ミロンのと入れ替へておきませう。」

「厭だ。」

「無茶を仰しやらないで、よく考へて御覽なさい。こんないゝ機会を遁すなんて、随分御損なお話ぢやありませんか。實際、私どもが今貴方にしてあけるくらゐに優待したら、ミロンだつてあんな馬鹿な眞似をしないで、すつと巴里にゐられたでせうよ、夜逃げなんかしなくてもね。」

「それは左様かもしれないが。」

とミロンはつぶやいた。彼はふるへてゐた。

「ですから諾といつて下さい。わざわざお持ちになつた繪をまたもつて歸るなんて、あんまり子供らしいぢやありませんか。」

「折角だけれど、返してくれたまへ。」

「だがそれは……」

「返してくれたまへ。」

ミロンは喉がれ聲で頑張つた。眼はもの凄く光つてゐた。

「残念なこつた。私どもは、先生をミロンよりも有名な大家にしてあけるつもりなんですよ。」

「それは左様かもしれないが。」

ミロンはもう一度低聲でさういつて、其店を立ち出でた。

日はとつぷりと暮れてゐた。

足早に街を急ぐ人々は、ほんやりしてゐるミロンを突きとばしてぐんぐん行き過ぎた。

それは湿々した陰鬱な晩であつた。恰度十五年前に夜逃げをしたときもこんな晩であつたことを、

ミロンは思ひだした。

彼は繪をかゝへたまゝ歩道の上にほんやり突立つてゐたが、何を思つたかその繪を高々と振りあげると、折しも車道に向うから驀進して來た馬車の前へほんとはりと投げだした。

『何か落ちましたぜ。』

誰か注意すると、

『え、難有う、知つてゐます。何でもありません。』

その瞬間、額縁が馬蹄に蹂みにじられ、車輪がその上を轢き過ぎた。殆んど音もしないくらゐだつたが、馬車の通つた跡を見ると、すた／＼に破けた畫布が泥の中へ滅りこんで、灰色の斷片が少しばかり、紙屑でも捨てたやうに残つてゐるだけであつた。

ミロンは踵をかへして、再びかの美術店の飾り窓の前へやつて來た。夜霧のために燈火がほやけてゐるけれど、飾り窓の中には、以前に描いた彼の小品が目立つ場所にかけられ、金色の枠に「ミロン」といふ彼の本名がはつきりと讀まれた。彼はやさしくも熱心な眼ざしでちつとその繪をうち眺めた。

過ぎ去つた日の思ひ出や、現在の境涯など、そこはかたなく心にうかんで來た。涙が一ト雫ほろり

と頬を傳はつた。

『哀れな老人。』

かう獨語をいつて、やがて鋪道を濡れ光らせてゐる小雨のなかを、彼はとほ／＼と歸つて行つた。

自責

扉が開いたけれど、私は廊下に立ちどまつてもちく／＼してゐると、

『此室でございます。』

私を迎へに来て其家まで案内してくれた婆さんが、かういつて再び促したので、私は思ひきつて入つて行つた。

室内はいやにうす暗くて、初めは低い蓋をかぶせたランプの外何も見えなかつたが、だん／＼眼が慣れて来るにしたがつて、一箇の人影がほんやりと壁にうつつてゐるのを認めた。その影はちつとして動かなかつた。何しろ痛ましく瘦せおとろへて、殆んど骨と皮ばかりになつて、顔なども尖々しく見えた。

石油の臭ひとエーテルらしい臭ひが私の鼻をついた。いんとした死の國のやうな静寂の中で、屋根

のスレートを叩いてゐる雨と、煙突に風のうなる音が聞えるだけであつた。

『先生。』

婆さんは寢臺へ屈みこむやうにして靜かに聲をかけたが、そのときに寢臺がやつと私の眼にも見え

て來たのであつた。

『先生、貴方が會ひたいと仰しやつたお方をお伴れました。』

すると影の主はあわて、半身起きあがつて、

『ありがたう、マダム。もういゝです、歸つて下さい。』

かすかな聲である。

やがて、婆さんが扉を締めて出て行つたのを聞きすましてから、その聲が改めて私に挨拶をした。

『こつちへお寄り下さい、貴方、私は眼が霞んで物の見分けもつかぬ上に、耳鳴りがしてお話もよく聞き取れません。どうぞ、ずつと傍へいらして下さい、そこに椅子があります。お呼び立てして大變失禮でしたが、實は、是非貴方にお話ししなければならぬことがありますので。』

彼は私の方へ顔をさしのべて眼をぎろりと見張つた。そして震へながら覺束ない聲で、

『貴方はジェルヌーさんですね。検事のジェルヌーさんでせう。』

と念をおした。

『さうです。』

私が肯つくと、安心したやうにほつと溜息をして、

『これで、私もいよく告白が出来ることになりました。』

とその年老いた病人は語りだした。

『先刻あけた手紙にはプリエと署名しましたが、あれは私の本名ではありません。御覽のとほり、私はもう死神に取憑かれてゐるので、人相も變つてしまつたでせうが、幾らか昔の面影が残つてゐるなら、おほろけにも見覚えがあたりでせう。然しそれはまア何うでもいゝです。』

随分古いことですが、私はもと検事を勤めてをりました。その頃は前途有望の法官といふ評判をとつたもので、私も大いに名を成さうといふ考へから、自分の才能を現はす機会をねらつてゐると、巡回裁判で、或る事件が私にその機会を與へてくれました。それは或る小さな町に起つた殺人事件です。パリでならさほど注意を惹く事件でもないが、町が小さいだけに大變な騒ぎでした。

私は法廷で判事がその告訴状を読み上げるのを聞いた時から、これはなかくの難事件だと思ひました。犯行については詳細な調査が遂げられたけれど、犯人が自白をしないので、屢々自白から惹出

される決定的事實といふものが缺けてゐました。そればかりでなく、犯人と目ざされて法廷へ引出された男は、死物狂ひに抗辯をしたものです。それがために法廷では、すべての人々の心持が疑惑から同情の方へ移つて行きました。御承知のとほり、暗黙の間に満廷に行きわたる同情といふものは、非常に力強いものなのです。

しかしさうした感情は、必ずしも法官を動かすには足りません。私は出来るだけ有力な證據を擧げて、反證を片つ端から打ち破して行きました。被告の生活状態を洗ひざらひ暴露して、その弱點と素行とを指摘しました。私は陪審官に向つて、恰度獵犬が獵師を獲物の方へ引張つてゆくやうに、犯行についてまざくと目に見るごとき説明を與へ、結局被告を眞犯人であると断定しました。辯護士は極力私の論告を反駁したけれど無効でした。私は無論死刑を要求したので、その通りに判決が下りました。

つまり私は、自分の雄辯といふ自負心によつて、被告に對して持つても然るべき同情といふものを押へつけてしまつたのです。で、その死刑の宣告は法の勝利であると同時に、私にとつては大いなる個人的凱歌でもあつたわけです。

ところが死刑執行當日の朝になつて、私は再びその男を見ました。私は牢役人が彼を寢床から呼び

起したり、死刑の準備をしたりするのに立會つてゐるが、何だか底の知れない表情を湛へたその囚人の顔を見ると、私は突然に或る惱みを感じました。その時の細々のことまでも、今なほ鮮やかに私の記憶に残つてゐます。彼は少しも悪びれずに、役人のするがまゝに腕を縛られ脚枷をかけられました。私はその顔を見るに堪へませんでした。何故なら、彼は人間を超越した冷静な眼付でちつと私を見つめてゐるからです。

彼はよく、監房から斬首臺の前へ引出されたとき、

「私は潔白だ！ 無實の罪だ！」

と二度怒鳴りました。シツ／＼といつて彼を黙らせようとした群衆が、却つて黙りこんでしまひました。彼は私の方へ向き直つて、

「私の死様をよく見届けて下さい、見ておく價値がありますよ。」

傲然とさう云ひ放つてから、教誨師と辯護士とを抱擁しました。そして人手も借りずに獨りでぐん斬首臺へ登つて行つて、斧の下る刹那を泰然と待つてゐました。私にはそんな風に見えました。私は脱帽してそこに立つてゐたけれど、もう目がくらんで何が何だか分りませんでした。

死刑が済んでからも、私は暫くの間頭が混亂して、何かわけのわからぬ懊惱でほんやりしてゐまし

た。何だか漠然と、その死んだ男が私に取憑つてゐるやうな氣がしてなりませんでした。

「初めは誰でもさういふ感じがするものだよ。」

と同僚が慰めてくれるので、なるほどそんなものかと思ひました。が、時が経つにしたがつて、その懊惱の理由がはつきりと解つて來ました。それは確かに或る「疑ひ」から來てゐるのです。そしてそれに氣づいたときから、私は心の平和といふものが失はれてしまひました。

裁判官が苟にも一人の人間を死刑に處した後の氣持は、貴方も十分に御承知でせう。誰だつて「あれが萬一無實の罪であつたら何うしよう。」と惑はぬわけにはゆかぬのです。そこで私は全力をあげてさうした考へと闘ひました。無實の罪だなんてそんな馬鹿なことがあるものか、おれの方が正しいんだと、強ひて自から信するやうに努めました。

私は自分の理性と、正常な感情とに訴へました。が、理性は常に「あの事件を裁斷するについて何の實證があつただらうか。」といふ疑惑のために押へつけられるのでした。しかも犯人の最期の有様を考へると、あの冷靜に冴えた眼付が私の目前にちらつき、あの落ちつき拂つた聲が聞えます。誰か、私に向つてこんなことを云ひました。

「あの犯人は實によく抗辯したね。あれで無罪にならないのが不思議だ。僕は正直にいふが、君の辯

論を聴くまでは、てつきり無罪だと思つたよ。」

それを聞くと、私は再び斬首臺の幻影に惱まされるやうになりました。

陪審官のそれにも優る傍聴席の疑惑——それをば發止と打ち靜めてしまつたのは、私の功名心と雄辯の魅力であつたのです。あの男を殺した者はたつた一人の、この私なのです。もしも彼が潔白であつたとすれば、その潔白な彼を死刑に處したといふ奇怪な罪惡の責任は、當然私が一人で負はなければなりません。

さアかうなつて來ると、何かしら申開きを立てるとか、良心の苛責を免れる方法を講じない以上は、とても安心が出来ません。で、私はかうした惱ましい懷疑から脱却するために、ごく内密に事件の再調査をはじめました。

一件書類やノートを調べてゐる間は、私の確信は前と變りませんでした。が、それ等は要するに私のノート、私の書類に外ならぬので——即ち私の偏頗な感情と、囚はれた野心と、遮二無二彼を罪に陥さうとする私の必要からつくり上げたものなのです。そこで、更に他の方法を考へ、法廷に於て被告に對して發せられた訊問や、その答辯や、證人達の證言などを調べました。なほ當時曖昧であつた點を明白にするために、犯罪の行はれた家と、その附近の街とを、見取圖や地圖について丹念に調べ

犯人が使用したといふ兇器を手にとつても見たし、裁判のときに氣づかなかつたり、却下されたりした他の證人にも一々會つて談話を聴いたりして、何遍となく繰りかへして調べた結果、つひにその男が無罪であつたといふ結論に達しました。

ところが皮肉なことに、その頃急に昇級の辭令が私に下りました。それは即ち横車を押した代價であつて、私にとつては恥の上塗りに外ならぬのです。

私は臆病でした。堂々と理由を述べることが出来ないで突然に曖昧な辭表を出したまゝ、旅に出してしまひました。しかし何んなに遠くへ行つても「忘却」といふものが私を待つてゐてはくれませんでした。煩悶が何處までもついて廻ります。それで、何等かの方法によつて自分の罪過を償ひたいといふことが、私の唯一の願望になりました。しかしかの男は刑場の露と消えてしまつたし、それに彼は元來浮浪人だつたので、私の賠償をうけてくれる家族も親戚もありませんでした。

かうなると、私としては、自己の過失を社會に向つて告白することが唯一の正しい道なのですが、生憎私にはそれだけの勇氣がありませんでした。同僚の憤慨と侮蔑を恐れたのです。

そこで最後に、この罪過を償ふ方法として、世間の困難してゐる人々、殊に罪ある人々を救護するために、自分のあらゆる財産を捧げようと決心しました。私などは人間を刑罰から免かれしむべく、

最も粉骨碎身せねばならぬ男なのです。それで私は、あらゆる世俗的榮華をふり捨て、安易と逸樂を却け、身を休める暇もないまで奔走しました。それ以來友人知己から全く遠ざかつて、孤獨な生活を つゞけたせるか、私はめつきり老こみました。そして自分の生計費をば極端に切りつめて、最近四五ヶ月この屋根裏へ来て暮らしてゐるうちに、計らずも病氣に取りつかれました。私はこゝでこのまゝ死にたいと思ひます。で、貴方に折入つてお願ひしたいことは……」

老人の聲は次第に微かになつた。私はその言葉を聞きわけけるために、震へる唇をちつと見守つてゐなければならなかつた。

「私は、この話を自分と共に葬つてしまひたくはありません。どうぞ貴方から法官諸君に傳へて下さい。さうすると、裁判官といふものは法によつて公平に審かねばならぬもので、何でもかでも人を處罰する目的で法廷へ出るものではないといふ教訓にもなりません。なほ、検事たる者が求刑をする際には、かうした誤審の恐ろしさをも考へて貰ひたいのです。」

「きつとお望みどほりに傳へます。」
と私が請合つた。

老人は顔が鉛色に變つて、手先がふるへて呼吸が切迫して來た。

「もう一つのお願ひは、私の財産——不幸な人達に分けきれなかつた金が幾らかその抽斗の中に残つてゐます。私が死んだあとで彼等に施して下さい。私の名前を出さずに、今から三十年前に私の誤審によつて死刑になつた男の名——ラナイユといふ名によつて施して下さい。」

「え、ラナイユですつて？ それは私が辯護した被告ではありませんか。私はその時分辯護士だつたので。」

老人はうなづいた。

「さうです。だから特に貴方にお出でを願つたので——この告白を是非貴方に聞いて頂きたかつたのです。私は元検事のドルーです。」

彼はさういつて、天に向つて兩手をさしのべるやうな身振りをやつて、

「ラナイユ、ラナイユ……」

と口の中でかすかに繰返した。

私はこの瀕死の老人の無残な有様を見ると、堪らなくなつて叫んだ。

「検事殿、検事殿、あのラナイユといふ奴はやはり眞犯人でしたよ。彼はそのことを死刑執行の日に告白しました。あの日斬首臺の下で私を抱擁したときに残らず打開けたのです。」

私は思はず職業上の祕密を洩らしてしまつた。しかし老人は枕の上に俯伏せになつて、はや絆切れ
てゐた。

私はこれをおもひだすことに、かの殉教者が、私のあの言葉を聞取つてから死んで行つたやうと信
ずるやうに努めてゐる。

誤 診

『先生。』

とその男はいつた。

『僕に結核があるかどうか、御診察の上で、包みかくしのないところを仰しやつて下さい。大丈夫で
すよ、僕は確かりしてゐます。どんな診断を聞かされたつて平氣なもんです。第一、先生はぶちまけ
ていつて下さる義務があります。それに、僕は自分の病状を知つておく権利があると思ふ。ですか
ら是非聞かして頂きたいんです。』

ドクトルは一寸ためらつたが、肘掛椅子を退らかして、火の燃えさかつてゐる暖爐の棚へ倚りかゝ
りながら、

『承知しました、着物をお脱ぎなさい。』

そして患者が服を脱いでゐる間に、問ひをかけた。

「衰弱を感じますか。寝汗はどうです……朝、明け方にはけしい咳が出るやうなことはありませんか……御両親はお達者ですか。うむ、何病でお亡くなりでしたかね……」

患者はやがて上半身だけ裸になつて、

「さア仕度が出来ました。」

ドクトルは打診をはじめた。患者はその打診音の一つも聞きもらすまいと踵をそろへ、兩腕をさけ頭をつき出して、耳を澄ました。ひつそりとした室の中にその指の音が鈍い音調でひびいた。

それから長い念入りの聴診をやつたが、それが済むと、ドクトルは笑ひながら軽く男の肩をたたいていつた。

「着物をきてよろしい。貴方はえらい神経家ですね。だが保証します、何處も何ともない。些とも悪いところはない……どうだね、これで満足しましたか。」

服を着かけてゐたかの男は、兩腕をあげたまゝ、シャツの前穴から顔を出したところだつたが、薄笑ひをうかべながら屹度ドクトルを睨みつけて、

「えゝゝ、大満足。」

彼はそれつきり黙つて着物を着てしまつたが、ドクトルが卓子に向つて處方を書いてゐるのを見ると、

「そんなものは要りません。」

と手眞似で制めて、かくしから取り出した一ルイの金貨を卓子の隅においた。それから彼は坐りこんで語りだした。聲は少しふるへを帯びてゐた。

「さてお話がある。外でもありませんが、今から一年前に一人の患者がこゝへやつて来て、僕が今いつたやうに、ぶちまけて眞實のことを教へて下さいとお願ひしたんです。そのとき貴方は診て下さつたが——随分ぞんざいな診察でした——そしてその患者に、結婚でしかも非常に手重いと宣告しましたね。いや辯解しなさんな、僕は嘘はいはない。それから貴方は、結婚も可けないし、子供は尙更生んでならんと云つたではありませんか。」

「左様かなア、私は思ひ出せないが、」とドクトルはつぶやいた。「そんなことがあつたかも知れん。何しろ大勢の患者なんだから。しかし貴方は何でそんなことを問題にするのかね。」

「何を隠さう僕がその患者だつたのです。獨り者といつたのは嘘で、僕はすでに妻子をもつた一家の主人でした。あのとき僕が歸つたあとで、貴方は僕のことなんか考へても見なかつたんでせう。貴方

から見れば僕なんかは、毎年肺病で死んでゆく何千といふ惨めな患者の一人に過ぎないんだ。しかしそのおかげで、僕は實に恐ろしいことになつたのです。」

彼は手でちよつと涙を拂つて、語りつゝけた。

「あの日家へ歸ると、妻や小さな娘たちが待つてゐました。冬の寒い時であつたにも拘らず、家の内は愉快でした。暖爐には火がかん／＼燃えてゐて、室には暖かい幸福と優しさが溢れてゐました。あの日までの僕は、歸宅の時刻——愛する者達に取り圍まれて骨休めをする時刻が來ると、心が勇み立つたものです。妻の接吻も、子供達の抱擁も、ほんたうに嬉しかつた。で、僕はその時刻を待ちかねて家へ歸つて來ると、その瞬間に、どんな心配も仕事の疲れもからりと忘れるのでした。ところがあの晩は、妻が僕に唇をのべたとき僕は撞きのけました。小さな娘達が僕へ搦まらうとして驅けて來ると、それをも押しのけました——貴方が僕の心に蒔いた種が芽生えて來たのです。」

僕達は晚餐の卓子についたが、食事中僕は心配な顔を見せまいとして一生懸命に努めました。しかし僕は悲しかつた。この者達は直きに僕と死別れねばならん。後には貧しい家庭が残る。そして娘達は父親なしで寂しく育つだらう——そんなことを思ふと、この胸がはり裂けるやうでした。

どうせ助からないにしても、他の病人だと、後に残る者達を心ゆくまで抱擁して、彼等の面影をあの世へまでもつてゆけるといふ慰藉があります。ところが僕の場合、人に近づくといふことが非常に危険なのです。「死」を背負つてゐるんですからね。生きながら生木を割くやうに人から隔てられて、もはや他人の歡びに加はる資格を失つたのです。

寢床へ入る時間になると、子供等はいつものやうに「お寢み」の挨拶をするために抱きついて來たが、僕は彼等を押しのけました。僕の口——この恐ろしい口を彼等に觸れてはならぬのです。

子供等が寢たあとで、僕も寢室へ入りました。家の中も、街も、次第にひっそりと更けわたりました。僕は電燈を消して、妻の傍へ身を横へたけれど、なか／＼眠れない。妻のすや／＼と寢んでゐる平和な寢息が聞えてゐました。

眼が冴えるまゝに、悲しいことを思ひつゞけてゐると、時の經つのが馬鹿にまだるつこしいものです。僕は両手で胸を押へて、指先で肺の悪い部分を探しあてようとしてました。けれど、痛くも苦しくもない。で、貴方の診斷が出鱈目ぢやないかと疑つたくらるるです。つひには貴方が間違つたんだと信じきつて、専らそれに望みをかけました。まつたく、さうした無茶な考へも起したくなるんです。

「僕が結核だなんて、そんなことがあるものか。もう一度外のお醫者に診て貰はう。」と僕は決心しました。

と、突然次の部屋で咳入る聲がしたので、僕はぎよつとしました。咳は子供部屋から再びひびいて来たが、それは乾いた、鋭い咳で、しまひにごほんくとやりだしました。僕は恐ろしくなつて、妻の方へ手をのべたけれど、眼を覺ませるのも氣の毒なので、そのまゝ耳を澄ましてみると、咳はまた起りました。僕は起きて子供部屋へ行つてみると、そこには仄ぐらい燈火が點いてゐて、彼等はいめいの寢床に寢んでゐたが、長女の顔がほうつと赤くなつてゐるので、觸つてみると熱があるやうです。それで僕は彼女の上にかゝんで、様子を窺つてゐると、彼女は數回咳をして、苦しさに寢がへりをうちました。それからなほとき／＼咳がつかましました。僕はやがて自分の寢床へかへつたが、枕につくと同時に、或る恐ろしい考へが浮んで來ました。あの娘も僕と同じ結核だ。てつきりそれに違ひないと思ひました。」

かの男は膝の上で拳骨を堅め、少し前へのしかゝるやうにして、詰るやうな口吻で後をつけた。「貴方はあのとき、御自分の診断がどういふ結果を與へるかを考へもしなかつたでせう。ところが、その翌くる日が堪らないんです。僕は娘の病氣を妻に告げるも氣の毒だし、お醫者を招ぶ勇氣もありませんでした。お醫者の診断は大てい察しがついたし、またさうした宣告を聞かされるのが辛かつたのです。僕は臆病と恥かしさで、それつきりになつてゐました。」

けれども心は休まらない。もう傳染なんかの問題ではない。もつと／＼恐ろしい妖怪が僕の前に立ち現はれたのです。それは遺傳といふ奴です。子供等は僕の眠付や毛色を遺傳したと同じく、僕の病氣をも遺傳したにちがひない。假りにその忌まはしい法則から免れたとしても、彼等に接近してゐた僕が、すでに病氣を感染させてしまつたのです。

なに、想像に過ぎないつて？ 冗談いつちやいけません。貴方がたお醫者達が、新聞雜誌だの講演會に意見を發表して、無學な公衆に向つてさうした智識を吹きこんで來たではありませんか。僕はそのとき、前から讀んだり聴いたりしたことが、記憶に沸きかへつたのです。

妻や娘等が次々に衰弱して、健氣にも病苦と闘ひつゝ、最後にのつびきならぬ臨終がやつて來る。僕はそれを眺めてゐなければなるまい。彼等の瘦せ衰へてゆく顔や體に、病氣の進行をあり／＼と見せられるでせう。しかもどんな科學の力だつて、この避けがたいものを救ふことは出來んのです。

ところでお聴きなさい。人は或る場合には、避けがたいとわかつてゐる苦痛ならそれを除いてやる義務がある。また人は自分でこしらへたものを解體する権利がある。肉體の苦惱をうけるばかりでどうせ助かる見込のない者なら、その生存を止めて、樂にしてやる権利がある。僕は煩悶の結果、かう信するやうになりました。つまり運命の神の代理に立つて、さうした苦患から彼等を救うてやらうと

したのです。

貴方はふるへてゐますね。先きを聞くのが恐ろしいんだね？……さうです、僕はこの手で妻子を殺しました。あゝ殺したとも。わかりましたか。皆んな毒殺してやつたのです。迅速に、手際よくやつけたもんだから、誰も感づいた者はありません。

初めは僕も一緒に死ぬる考へだつたが、しかし、僕は自から罰をうけねばならぬと思ひました。尤もその罰は、彼等を殺したためにうけるものではありません。殺したことは正當だと信ずるからです。それよりも寧ろ、彼等を生んだがためにです。僕は彼等を生の重荷から救ひ、苦患から自由にしてやつた代りに、今度は僕がその重荷と苦患を一身に背負つて、死物ぐるひの生涯を送らう。おそらくそれ以上に大きな贖罪がなからうと決心しました。ところが不思議ぢやありませんか。妻子が死んでから數週間経つて、僕は元氣が出て來たんです。胸の痛みが去つて、血痰も止まりました。食慾が旺んになつて、肉がついて來ました。さうです、僕は肥りはじめたのです。

最初、これは何か微妙な作用で病勢がちよつと停滞したに過ぎないので、後に一層はけしく盛りかへして來るだらうと思つてゐました。ところが數ヶ月後には、僕は全快を認めなければなりません。病氣が癒つたのか、それとも僕は最ました。まつたくけろりと癒つたんです。一體どうしたんでせう。病氣が癒つたのか、それとも僕は最ました。まつたくけろりと癒つたんです。一體どうしたんでせう。病氣が癒つたのか、それとも僕は最ました。

初から結核ではなかつたかも知らん。かうした漠然たる疑ひが、しだいにはつきりと頭にうかんで來ました。この恐ろしい意味がお判りですかね？ つまり僕が結核患者だつたら、自分のやつたことは正當だが、結核患者でなかつたとすれば、僕は理由もなく、徒らに人殺しをやつたといふことになりません。

僕はそれを確かめるために、一年間待つてみました。その間に、僕は病氣をぶりかへさせようとして、あらゆる不攝生をやりました。しかしどうしても駄目でした。そこで僕は、たしかに貴方が間違つてゐた、しかもひどい誤診であつたといふことを確信すると同時に、悲しくなりました。曾て泣いたことのない僕も、それからといふものは、極端に涙もろい男になりました。あゝ僕は生涯を誤つた。罪もない者達を殺した。そして、永久に悲歎の涙に濡れなければならなくなつたのです。これも皆んな貴方の誤診のお蔭です。それで今日は、貴方の口から、誤診したといふことを告白させるためにやつて來たんです。」

彼は起ちあがつて、腕ぐみをして、

「ところが、貴方は迂濶それを告白してしまつたんだ。貴方は先刻僕を診察して「何ともない、何ともない。」といつたときに僕の眼付を見なかつた。えゝ確かに見なかつた。もしも僕の眼付を一目見

たなら、貴方はふるへ上つたにちがひない。何故なら、これから僕が云はうとすることを、あの時すでに察したゞらうから……」

するとドクトルは眞蒼になつて、どもり／＼いつた。

「そりや私だつて誤りがないとは云へない。近頃の醫學界では、この結核といふ考へが煩さく何にでも附纏ふやうになつたものだから、我々もつひそれに釣りこまれて、一過性の、偶發性のラッセルでも、誤つて結核と解釋することがある。私が間違つたかも知れない、いかなる名醫だつて誤診といふことは免れないんだから。ドレもう一度拜見ませう。」

そのとき男はから／＼と凄い笑ひ方をして、

「もう一度だつて？ 人を馬鹿にしちやいけない。切先へ飛びこんだ上は、今さら體をかはさうたつて駄目だよ。何處も何ともないと貴方が明言したではないか。僕は何ともないのだ。今度は僕が無條件で貴方の言葉を承認しよう。」

しかし貴方のおかげで僕は人殺しをやつたんだ。貴方は共犯者だ。なに、意識しない共犯だつて？ そんなことがあるもんか。貴方が首脳で、僕は手先だつたのさ。「正義の裁判は唯一にして不變なり。」つていふから、僕——「神経家」の僕が審いて、判決を下して、そして刑罰を行つてやらう。貴方

が先きだ、それから僕だ。」

轟然二發の銃聲がひびいた。召使が駆けつけたときは、二人は仰のけに倒れて絆切れてゐた。脳漿と鮮血が卓子へはねて、その上にあつた、

臭 剝 一五〇

蒸 水 ……………

と書きかけた處方箋にも、一點の紅い汚點が附着してゐた。

見開いた眼

寢床に仰向きになつてゐたその死人は、實に物凄い形相だつた。

體はもう硬直してゐたが、頭髮は逆立ち、口を歪め、唇は上反つて、両手で喉を掻きむしる恰好をしてゐた。そして小さなランプが一つ點つてゐる薄暗い室の中に、なほ生けるがごとくくわつと見開いた兩眼には、最後に何か恐ろしいものを目撃した恐怖の跡が、まざ／＼と残つてゐた。

その傍で、警部や警察醫や刑事達に取圍まれた一人の下男が、不氣味な屍體を見まいとして、自分の顔へ手を翳しながら、話をつゞけた。

「十一時頃だつたと思ひます。旦那様はもうお臥みでしたが、私は自分の部屋へ退らうとしてゐると、叫び聲がしました。ハイ、たしかに叫び聲です。私はいきなり階段を駆け登つて、旦那様のこのお室の戸を叩きましたが、御返事がないものですから、室内へ入つて御様子を見ると、思はず後退りをし

て大聲で助けを呼びました。ところが、そのとき、ランプのあたりに二個の人影がちらついたので認めました。で、私は飛ぶやうに階段を降りて、庭を突切つて、お届けに行つたんですが、その間に誰も此室から逃げ出せる筈がありません。何故つて、私は戸口を二重鍵で締めておきましたし、どの窓も嚴重な格子付になつてをりますので。」

「うむ、お前の考へで怪しいと思ふ者がないかね。その人影つていふのは、判然と見たんぢやないのか。」

下男は漠然たる身振りをやつて、少しもぢ／＼しながら言葉をつゞけた。

「實は、かうなんです——二年前から小間使が一人住込んでをりまして、つまりお妾ですが、旦那様は六十四で、その女はまだ若いものですから、たうとうお氣に入りになつて、鍵を預るといつたやうなわけで、いづれ遺産を相続するだらうなんて噂もありました。それなのに、その女は夜分に男を引入れたりなんかしまして……私達もこれまでは秘密にしておきましたが、どうも警察の方がお出になつた上は、何もかも申し上げないわけに行きません……それで先刻私が見た人影といふのも、實はその男女だつたのでございます。」

「それは重大なことだぞ。間違ひがあるまいな。」

「わかつてをります。」

下男はきつぱりと答へた。

「よしつ、その小間使をつれて来い。」

小間使は寝亂れ姿の髪も整へずに、ふるふる手先で下着の襟をかき合せながら入つて来たが、

「わたしは何も存じません。」

と問はれぬ前から、はや涙ぐんで辯解した。

「ドクトル、屍體を検案して下さい、成るだけ動かさんやうにしてね。」

警部は警察醫にさういつてから、女の方へふり向いて、

「お前を呼びにやつたとき、お前は何處にゐたのだ。」

「わたしの部屋にをりました。」

「お前だけか。」

「あら……」

それは全く自然に出た調子であつた。

寸時皆が黙こりんだ。と、女は俄かに齒の根も合はぬほどがたくふるへだした。

「何故怖がるんだ。何がそんなに怖いのか。」

彼女は頗で屍體の方を指して、

「あれ、あれ……旦那様が……わたしを睨んで……」

「なアんだ、馬鹿々々しい。確かりしろ。ところで、お前はここの人のお妾だつたさうだな。」

彼女はちまこまつて、両手を喉へあてたまふ、死人の眼をちつと見つめたが、

「わたしはもう、怖くて見てゐられません。」

「お前も、情夫も——お前には他に情夫がある筈だ——この人が大變な金満家つていふことを知つて

ゐたやう。」

「存じません。それに、わたしは情夫なんかございません。」

「今夜此家へ忍びこんだ男は何人だい。」

「存じません。」

「お前は先刻誰と一緒に階段を逃けたのか。」

「存じません。」

「そんなら、今この室の外で二人の警官に捕まつてゐる男は何者だい。」

「相済みません……わたしは嘘を申しました。」彼女は首をうな垂れて、口ごもりながらいつた。「けれども、その外のことは何も存じません。」

そのとき警察醫が、

「ちよつと此處へ。」

と警部に聲をかけた。

女はまたふるへだし、両手に顔を押しかくして、

「お、怖は……旦那様が、わたしを睨んでるます……どうぞ、わたしを彼方へつれて行つて下さい……」

警察醫は屍體にかゝみこんで指で觸りながら、低聲でいつた。

「何でもなさうです。別段に變つた點もありません。暴行をうけたらしい形跡は全然ないし、擦過

傷すらもないんですからね。」

「そんなら毒殺かな。」

「毒殺といつても、暴力による毒殺なら、やはり一種の暴行ですよ。何故つて、毒を嚙下させるためには、喉を引絞めるとか、鼻を押へなければならぬもので、随つてそこに何か微が残らねばならぬわけです。鼻の上に爪痕があるとか、搔き痕とか、頸を絞めつけた痕とか、とにかく、さうした痕跡

がなければならぬわけです。」

「そんなら、死因をどう説明しますか。」

「まづ脈管閉塞か、心臓痙攣か、でなければ動脈瘤破裂でせうな。」

「つまり自然死なんですか。」

「勿論さうです。」

「だが併し……」

そのとき、まだ両手に顔をかくしてゐた女が、一層はげしく喚き立てた。

「彼方へつれて行つて下さい……旦那様が、わたしを睨んで……お、怖は……」

「だが併し、」警部は低聲になつて、「この女が怖がるのも無理がありませんよ。死人を御覽なさい。いつたい自然死で、こんな物凄い顔になりませうか。不気味な死人には慣れつこになつてゐるわしです。へ、眞正面に見られんくらゐですからね。わしは、ピストルで脳天を射抜いた奴も見たし、腦漿が血潮に浸つてゐる部屋へ踏みこんだり、女子供の惨殺された屍體だの、松火のやうに燃えながら死んだ焼死者も見たが、この死人のやうな物凄い顔は、見たことも想像したことありません。どうです、この眼、この表情、そしてこの開いた口は。貴方が何といつたつて、自然死でこんなひどい形相にな

るとは思へないんですがね。』

『お、怖は……わたしを睨んで……』

と女は相變らず口走つてゐた。

『それに、この女は狂氣でもないのに、こんな風です。お聴きなさい、わたしを睨んでゐる』なんて喚いてゐます。そら、まるで魔攻か、歌曲の折返しでも唱へてゐるやうな調子ぢやありませんか。犯罪者はよくこれをやりますよ。被害者の傍へ引きだすと、彼等はきつとこんなことを口走るもんです。自分で殺した者が斷末魔の形相や姿勢のまゝで死んでゐるのを見たら、そりや堪らんでせう。とにかく、わしを信じて下さい、間違ひつこありませんよ。』

警部はちよつと黙りこんで、女から死人の方へ視線をうつした。死人の眼は相變らず不可思議な間を見つゑてゐた。

女は間斷なしに例の忌はしい歎願をくりかへした。

『彼方へつれて行つて下さい……わたしを睨んでゐます……彼方へつれて行つて下さい……』

しかし誰もそれに取合はうとしなかつた。

警部はまた聲をひそめて、

『あ、ドクトル、解つた、解つた。そこで最後の叫びが何のためで、何故暴行の痕跡が残らないかを説明しませう。まづ、女が情夫と二人で此室へ忍びこんだことは、疑ふ餘地がありませんね。彼等は主人が眠つてゐると思つてそつと戸を開けました。その目的が物盗りであつたか、殺人であつたかは審問の上で判りませう。ところが主人はその時まで眠らずに半醒してゐたんです。ランプが消されてゐなかつたのが何よりの證據です。つまり主人は、戸の蔭から、多分兇器を所持した不氣味な二箇の人影が室内へ忍びこんだのを見て、きやつと聲を立てたのです。』

『もう我慢が出来ません……』女はか細い聲で呻いた。『もう可けない……わたしを睨んで……』

『この女を彼方へ連れだませうか。』

一人の刑事が訊くと、警部は、

『いや、此奴狂言がうまいんだ。こつちへ連れて來い、寢臺の頭へ。さうく、そこなら死人の顔が見えまい。死人は寢がへりを打ちはしないからな……どうだ、これで氣が落ちついたか。もう怖い顔が見えんぞ。』

女はほつと溜息をして、それつきり例の歎願をやめた。

そこで警部は説明をつとけた。

「今もいつたやうに、老人は恐怖の叫びをあげたのです。殺されかけたのでなければ、夜中にそんな消魂しい聲を立てるわけがないですよ。ところが忍びこんだ二人は、その叫び聲にぎよつとして階段の方へ逃げましたがそのときに、下男が二人の姿を認めたのです。だから文字通りに殺人が行はれたのではないが、主人は彼等が手を下す前に、恐怖のために死んだのです。醫學上から見て貴方の御意見はどうですか。」

「それは、醫學上あり得ないことではない。大方そんなことに違ひないと思ひますがね、たつた一つ腑におちない點があります。屍體を御覽なさい、首を縮めたなりで正面を向いてるますね。そしてこの視線を辿ると、まつすぐに寢臺の裾の方を睨んでるます。ところが、犯人等が入つて来たといふ戸口は別の側にあつて、三メートル以上も右へ片寄つてゐるぢやありませんか。そこで死人のくわつと開いてゐる眼は、果してその戸口を見てゐますかね、どうです。」

『それで?』

警部が問ひかへしたとき、人々はきやつといふ叫び聲を聞いた。見ると、女が突然に鯨こぼつて、口を歪めて両手で喉を掻きむしりながら、はや呼吸を引取るところだつた。人々は彼女が仰向けに打倒れるのを恐れて早速抱きとめたが、彼女は首を縮め、眼玉をくわつと剥いて前方を凝視したまゝ、

體はもう硬ばつてゐた。

下男はふるへあがつて、

「不思議ですね、今のこの女の叫び聲は旦那様のと酷似でございました。」
すると寢臺の裾の方に立つてゐた誰か、ふと主人の死顔と女の死顔とを見くらべて、

「この二人の死人は、眼付が酷似ですね……ひよつとすると、死際に同じものを見たんぢやないでせうか。」

「お、君のいふとほりだ。此女に罪がない。」
と女の屍體を運ぼうとして胴中を抱へてゐたドクトルが、だしぬけに叫んだ。

「そら、ゐたぞ、ゐたぞ……老人の見たものが……そして、この女の見たものが……」
羽毛布団の下から、眞黒なものがむくくと姿を現はした。それは一疋の大蜘蛛だつた。腹のふくれた、背の盛りあがつた、恐ろしく巨大なその天鷲絨色の生物が、逞ましい毛むくじやらかな肢を毛布にふん張つて、寂然した沈黙にかさこそと音を立てながら、死人の不氣味な顔へのつそりと這ひあがつて来たのであつた。

無 駄 骨

そのジャン・ゴオテといふ男は、見たところ、ちつとも危険な犯罪者らしくなかつた。

年齢はちよつと見當がつかないが、弱さうな小柄の青年で、何だか子供の時分から病身で悩んで来たといふ風であつた。とき／＼そ／＼つかしく鼻へあてる近眼鏡の蔭にさまよふ眼付なんか、ほんたうに静かで柔和だつた。叱られて怖々してゐる子供といった方が適當なくらゐで、これが人殺しをした青年とはどうしても思へなかつた。

ところが彼は實際、人殺しをやつたのである。そして犯行後數時間目に逮捕されたのだが、警官から肩を押へられると同時に、何等悪びれた風もなく、自分が犯人であることをまつすぐに自白してしまつて、しかしそれ以來、頑固に口を噤んでゐたのであつた。

『おい。』豫審判事が或る日彼を詰問した。『お前は被害者と全然無關係で、また、その家から何も盗ま

ぬと云つたな。そんなら何のために彼を殺害したのか。』

『別段に理由はありません。』

『いや何か理由があつたらう。やたらに他人の家へ入りこんで人を殺すといふことは出来るものではない。いつたい、何のためにあんなことをやつたのか。』

『目的もなくやつつたのです。』

『いや、あの男は、お前に對して何か不都合なことでもしたんだらう。』

青年はもぢ／＼して眼を伏せて、曖昧な身振りをしながら、

『左様ぢやないんです。』

口の中で呟いてゐたが、何を思つたのか急に調子をかへて、

『え、實は、出鱈目にやつたことではなくて、理由があつたのですが、最初に否定したものですから、

つい云ひそびれてしまひました。そればかりでなく、有慾に申しあげにくい事情がありましたので、

實は、私は私生児でございます。母は貧苦のために非常な苦勞をして私を育ててくれました。あの時分のことを思ひますとほんたうに慘めなもので、私たち母子は、涙の乾く隙ともありませんでした。學校へ行くと皆が私を「父なし兒」だといつて弄りものにします。私はわけが解りませんでした

が家へ歸つて母に訊きますと、母は兩手を顔にあて、泣くものですから、子供心にもそれはきつと悲しいことにちがひないと思つて、それつきり父なし兒といふ言葉は口にしませんでした。母は身の上話や愚痴つほいことは、ついぞ一度も云つたことがなく、黙つて死んで行きました。母が亡くなつたとき、私は十四でございました。

たつた十四で、私は獨りほつちになつたのです。親戚は無論のこと、友達といふものもありません。そんなわけで、私は自分で生活を立てる前から、もう世の中といふものが厭になつてゐました。しかし實をいふと、初めはそれほど辛くもありませんでした。私は或る家に奉公に出まして、食べ物も寢床も與へられ、とき／＼は着ぶるしの着物なども貰つてゐました。

それから六年経つて、二十歳の時から一本立ちで生活することになりますと、初めて貧乏の辛さが解つて來ました。私は或る問屋の記帳係に雇はれましたが、一月百フランといふ薄給で二年間も辛抱しました。

勤め人となれば、服装も相當に小綺麗な、しやれたものを着なければならぬのです。それで、服代を浮ばせるためには、食べ物も節約して、一日一食で我慢しなければなりません。而もほんの少しばかり食べるのです。とき／＼、往來をあるきながら眩暈がして、頭がぼうとして、今にも倒

れさうになるものですから、人家の壁などに倚りかゝつて漸と體を支へました。空腹の故だつたのです。

ところが或る朝店へ出勤しますと、主人が申しますには、

「どうもお前の仕事づりが氣に喰はん。お前はこの頃とき／＼間違つた帳付けをやる。つまり仕事に身を入れてゐないからだ。それに、いつたい服装がだらしない。わしはそれも氣に入らぬ。うちの店に勤める者は第一に服装からしてきちんとしてゐてくれなくては困る。」

と、主人は生地しじの綻ろびた私わたくしの上衣うわぎの裏うらに觸つてみて、

「こんなものを着て店へ出て來る奴があるもんか。」

云ひわけをしても、主人は聴きません。

「何をいふんだい。着物なんかは、少し氣をつけると幾らも小綺麗にしてゐられるものだ。」

とがみ／＼云ひます。店員達が私の小言をいはれてゐる傍を行つたり來たりしてゐます。その小言を彼等に聞かれはしないか——さう思ふと私は血が逆上するの覺えました。

その日は、まるつきり物を食べませんでした。胃の腑が空つぽになると頭の方が鋭敏に働きます。帳付けをしながらもぼろ／＼と涙を流しました。饑と恥で止め度なく泣きましたが、そのとき不圖、

たとへ母が死んでも父親といふものがある。私は全然獨りほつちになつたのではないといふことに氣附きました。

さう思ふと何となく力強くなりました。それで、結局、父親を訪ねよう、會つて事情を懇へたなら父親は金持ちだから助けてくれるにちがひない——そんな風に決心しました。

翌くる日、私は父親の許へ訪ねて行きました。そのときは、彼に對してほんたうに優しい心持が私の胸に湧きおこつてゐたのでした。

父親は小柄で脊が曲つて、蒼白い顔をした、足元も覺束ない老人です。長患ひでひどく衰弱してゐました。彼は私が入つて行くと、いきなり、

「お前は何者だ。何の用でやつて来たのか。」

その無愛想な聲をきいて私はぞつと寒氣がしました。それでも吃りく訪問の趣意を話しはじめる

と、彼は身ぶるひしながら慌て、

「しつ、聲が高い。もつと低聲でいへ。人に聽かれると困るぢやないか。」

彼は出来るだけ早く話を切りあげたい風でした。そして私を戸口から押し出して、

「住所書きをおいて行け。お前のために何うしたらいいかを考へよう。よろしく、考へておく。わし

は病氣で會へないが、手紙をやるぞ。」

何だか曖昧な挨拶です。それで、私は千々に亂れた胸を一生懸命に落ちつけようと努めながら、宿へ歸つて來ました。

その後まる一週間待つたけれど、返事がありません。といつて、私は再び訪ねもしませんでした。

老人の氣を顛倒させることを恐れたのと、何ほ何でも私を見殺しにすることはあるまいと信じたからです。

しかし私は、訪問する代りに、父親の家のあたりをぶらつきました。そして、祕密を氣づかれないやうに要領しながら、近所の人にそれとなく様子を訊ねると、

「ふむ、あの人ですか。どういふ御用か知らんが、何かお頼みの筋ならまア止した方がいゝでせうよ。

鋪石よりも冷い人ですからね。だがあの人もあるとして金を蓄めこんだが、もう長いことはありますまい。この頃はめつきり弱つて、自分で自分の體をもて餘してゐるついでいひますからね。」

「でも、あの人には親戚とか、親しい友人がありません。」

「友人なんか一人だつてありはしない。若しかしたら佛蘭西の何處かの隅に、甥の子供とでもいふやうな遠縁の者がいないとも限らないが、彼はそんな者にビター一文だつて遺産など遣るものですか。財産

はみんな、十五年も彼家の家政婦をやつてゐるとかいふ、あの女に捲きあけられるでせうよ。あの女は先からそんなことを吹聴してゐますからね。彼は『おれは銅貨一つだつて親戚などにやりはしない。死んだあとで親戚のふところを肥すなんて馬鹿なことは厭だから、そつくりお前に與れてやる。』と常々あの女にいつてゐるさうです。だから、あの女はそりや熱心に家の利益を計つてゐますよ。』

この話を聞くと、私は急に父親が憎らしくて堪らなくなりました。私が貧苦と闘つて、不幸な目に遭つてゐるのも、元はといへば、みんな父親のせりなんですから。

私はそこを立ち去ると、當てもなく街をぶらつきました。疲労もわすれて、頭の中が痼癩で煮えくりかへるやうです。どれだけ長く歩いたかわかりませんが、兎に角歩いてゐるうちに、空腹でぶつ倒れさうになりました。それで城壁の近所——たしかあの邊であつたと思ひます——の安飲食店に入りました。

貧しい食事を済まして勘定を拂つたあとは、財布が空つほど一錢も残つてゐません。月末の給料日までの六日間を何うして暮らしたらいいだらう——そんな考へに耽りながら衣囊へ手をやると、ふと指先に觸れたのは麵麩を切るときに使ふナイフです。刃わたりの長い薄刃で鋭利なナイフです。私は機械的にそのナイフの柄を堅く握りました。

判事殿、私は決して辯解のため、又は自分の罪を軽くするために、こんなことを申しあけるのではありませんが、實際、そのナイフを所持してゐるといふことに氣付くと、急に氣が變つてしまつたのです。私はその柄を握り、刃先を指で試してみました。それから何處をどう歩いたのか、夢中で自分も知らないうちに、父親の住まつてゐる建物の前に立つてゐました。

私はその際に、自分の行動を考へてもみなかつたし、また、如何に恐ろしい考へだつて思ひ止まらうといふ氣はありませんでした。いや、取止めて何も考へてなんかなかつたやうです。唯、悠々と躊躇はずに、玄關の呼鈴を鳴らすと、やがて門が開きました。瓦斯は消えてゐました。私は門番に出鱈目な姓名をいつて、二階へ上つて行きました。

階段を登りきつて立ちどまつたとき、初めて漠然と、自分の歩調の狂氣じみてゐることに氣づきました。戸口の呼鈴を鳴らしたつて、夜分あんな時刻に戸を開けて貰へないことは分りきつてゐます。といつて、聲でも立てようものなら、忽ち近所合壁の彌次馬が飛びだして来て、私を階段から突き落すでせう。

私は衣囊へ手をやると、恰度自分の室の鍵が入つてゐたので、それを取りだしてそつと鍵穴にあててみました。と、鍵は音もなく入つて行きました。泥坊がするやうに忍びやかに鍵を廻すと、たし

かに手ごたへがありました。偶然にも鍵が役立ったので、我れながらびつくりしました。数秒間暗がり突立つてゐたが、そのとき初めて、自分が何のためにそこへやつて来たかを考へてみました。ふと、戸の隙間から廊下の敷ものゝ上に一條の燈火が射してゐるのを見て、私はごく靜かに戸を開けました。

父親は、私が忍びこんだのも知らずに、卓子に向つて一心に何かやつてゐる風でした。卓子の上には、緑色の蓋のかゝつた電燈が一つ點いてゐて、その部分だけが明るけれど、部屋中が一體にほんやりと暗影つてゐました。

父親は何か書きものをやつてゐるやうだが、私の方からは、彼の禿け頭と、瘦せた肩が見えるだけです。私は息を殺して爪立ちをしてそうつと忍んで行くと、彼は一枚の大きな紙に向つて、熱心に何か認めてゐるのです。肩ごしに覗いてみると、「遺言状」と標題をおいて、その下に三行、細かい文字で何か書きつけてあります。

その瞬間に、先刻近所の人に聞いた噂が、さつと私の頭に閃きました。そして、私の母の地位を横取りした貪慾な雇婆と父親の關係が、はつきりと解つたやうに思ひました。

「さては、財産を全部雇ひ婆にくれるんだな。」

と思ふと、私は頭尖から水を浴びたやうにぞつとしました。實子たる私が死ぬどほ饑に迫つて、寒さに震へてこゝに立つてゐる。しかるに、その父である彼は今、無造作に忌はしい遺言状を完成しようとしてゐる。それが出来上つてしまへば、もう取りかへしのつかぬことになる。さうすると、衰れ一錢一厘たりとも私の手には入らない。そして、父の財産はすべてあの強慾ばりの雇ひ婆に與へられるのだ。彼女は、父親の死ぬる日を待ちかねてゐるんだ。實に怪しからん——さう思つて更にその紙を覗いてみると、

余ノ財産即チ動産並ニ不動産ノ全部ヲ……

そこまで讀んで、私は思はず齒ぎしりをしました。と、彼はびつくり跳び上つて、私の顔を見るとアツと叫びながら、その遺言状を私に見せまいとして、本能的に兩手でかくしてしまひました。

ナイフは私の手に握られてゐた。私はそれを振り上げるが早い、彼の襟ぐび目がけて襦も透れと突き立てました。

私はやがて自分のしたことに氣がつくと、急に恐ろしくなつて、驅けだしました……その後のことは判事殿御存じのとほりでございます。』

青年は陳へ終ると、近眼鏡をはづして涙を拭いた。汗の雫が顔を傳はり、齒の根ががたくふる

へた。

判事はちつとその様子に眼をつけてゐるが、やがて、どす黯い血痕の附着した一枚の紙をひろけて、

『お前は、この遺言状の後の方を讀まなかつたのだな。』

青年は黙つて首をふつた。

『そんなら、讀み上げるから、聴くがい。』(遺言状——余ノ財産即チ動産並ニ不動産ノ全部ヲ我が子ジャン・ゴオテニ與フ。尙ホ、余ハ無情ナル父親タリシコトニツイテ、彼ノ寛恕ヲ乞フ。余ハ至ク……)こゝで杜絶れてゐる。お前は、この遺言状を完成する時を彼に與へなかつたのだ。』

すると殺人者はバネ仕掛の人形のやうに跳びあがつて、あんぐりと口を開き、狂氣じみた目附をして、

『何ですつて。わが子に……こ、この私に財産を……』

吃り／＼さういつたが、暫くちつと押黙つてから、今度はゲラ／＼笑ひだした。そしてむやみと自分の頭を叩いて體を左右にゆすぶりながら、

『メたつ、金持ちになつたぞ。おれは金持ちになつたぞ。』

と途方もなく大きな聲で怒鳴つた。哀れ氣が狂れたのである。

空 家

錠をこぢあけて屋内へ入ると、彼はその扉を要心ぶかく締めきつて、ちつと耳を澄ました。

この家が空家であることは前から知つてゐるが、今入つてみると、寂然してゐてカタとの物音もないのと、あやめも分かぬ眞の闇に、一種異様な氣味わるさを感じた。一體、今夜のやうに、人がゐてくれなければいゝといふ願望と、さうした靜寂の不氣味さを同時に感じたといふことは、彼としてはこれまでに曾てない經驗であつた。

やがて手探りで扉の門をおろすと、少し安心して、衣囊から小さな懐中電燈を出して四邊を照らしたが、闇を貫くその燈影は、胸の動悸に震へてちら／＼した。

彼は強ひて勇氣を出して、

『なアに、自分の家にある心持さ。』

獨りごとをいつて、つと笑ひながら、抜き足さし足で食堂の方へ入つて行つた。其室は、すべてのものが几帳面に整頓されてゐた。食卓にびたりとつけて四脚の椅子が置かれ、更にもう一脚の椅子が、少し離れて、澤々しい籐木の床に影を落とし、そして何處ともなく煙草と果實の匂ひが仄かに残つてゐた。

側柵の抽斗をあけると、銀の食器が順序よく置き並べてあつた。

「こんなものでも無いよりは優しだ。」

さう思つて、それらの銀器を衣囊へねちこんだが、動くとそのフォークやナイフがちやくちやく鳴るものだから、空家で聞き手が無いと知りつゝも、その音のする度にどぎまぎした。そして今度は、瑛や、銀製の果實庖丁などの入つてゐる函には手も觸れずに、

「こんなものは、おれの目的ぢやないんだ。」

自分の氣怏れを辯護でもするやうに、ぶつ／＼いつて、つま立ちをしてその柵を離れた。

しかし相變らず躊躇ひがちに、衣囊の中で重い銀器を手探りながら、食卓のところに立ちどまつて戸口から隣の小室の方を覗きこんだが、厚い窓掛がおろしてあつて眞暗で何も見えなかつた。彼は満身の勇氣を奮ひおこして、柄にもないこの氣怏れに打克たうとした。そして結局夜遊びから自宅へ

歸つて來た男のやうな、氣安い歩調でつか／＼と隣室へ入つて行つた。

と、不思議にも今までの恐怖心が忽然消えてしまつた。

古い櫃の上に枝付燭臺が一つ載つてゐるのを見ると、すぐにマッチを招つて蠟燭に火をつけてから、改めて室内の様子を見廻はした。壁には油繪や、金縁の寫眞などが懸けられ、床には家具やピアノが置いてあつて、暖爐棚の下からは、燃え滓や煤の臭ひがふんと來た。彼は卓上の書類を摘んでみたり、銀の置き物をちよつと持ちあけて重さを量つたりした。そしてもう一度室内を見廻はしてから、枝付燭臺を卓子の上へおいてふつと吹き消すと、奥の寢室の方の戸をあけた。

彼は少しもまごついた風がなかつた。といふのは、四五日前に、貸家になつてゐた此家の間取りを見るふりをして、家具調度や、それらの置かれた位置をすつかり見とゞけておいたのである。

職業的に慣れた彼の目で一ト目見ると、屋主の老人が重要書類を入れてある用算笥や、金が藏つてあるに相違ない櫃の在りどころや、その他寢臺が凹間の中にあること、硝子戸のついた抽斗澤山の大きな衣裳戸柵にも、相當金目のものが入つてゐるらしいといふことまで、残らず見極はめることが出來たのだ。

暗がりをば手探りで、椅子に躓つきもしずに、用算笥の方へまつすぐに歩いて行つた。やがてその

用筆筒へ手がとくと、頂上から正面を撫でおろして、錠のところ左の指を一本あて、おいて、右手で衣囊の鍵束をさぐつた。

そのとき彼はちよつと慌て氣味になつてゐた。といつても、暗さと静寂に對するあの不思議な恐怖が盛りかへして來たのではない。彼は今、賭博者が切り札を出す前に忙しく指先でいちくらすにゐられないやうな焦かしさを感じてゐるのだ。

この用筆筒の中には何が入つてゐるだらうか……財産権利書か……それとも紙幣か……どのくらゐ入つてゐるだらう……どんな幸運がこの板一枚の蔭に彼を待つてゐるだらうか。

だが牛憎、鍵束が容易に衣囊から抜けて來ない。先刻銀器を取りこむときに、そつつかしく叩きこんだので、それが衣囊の中で鍵束とこんぐらかつてしまつたのだ。で、彼はやたらに衣囊を捲き廻はしてゐるうちに、匙が鍵輪へ喰ひこみ、フォークの尖は折れ曲つて、上衣の裏をとほして肌を引掻くといふ騒ぎだ。焦れば焦るほどへまに行く。

彼は床を踏み鳴らし、口小言をいつたり、齒を喰ひしばつたりして力一杯鍵束を引抜いた拍子に、糸がぶつとりと切れて、錆び鐵鎖のやうな音響ともにも、鍵も銀器も一しよくたになつて床に散亂した。彼はまた焦りだした。もう一息といふところまで來てゐながら、ぐづぐづするうちに時が移る。

正確な時刻はわからないが、入りこんでから可成り暇どつたやうだ。そのとき初めて時計のチクタクが耳についた。時がぐんぐん飛んでゐるのだ。

彼は膝まづいて、一本の鍵を錠穴へさしこんで、耳を澄ましながら廻したけれど、手應へがない。そこでもう一本の鍵を拾ひあげた。更に第三、第四と、他の鍵を注意ぶかく試して行つたが、やはり可けない。結局一本も役立たぬと知つたらまた癪癪が起つて來た。

「面倒だ、打破しつちまへ。」

懐中鐵挺を取りだし、器用な手つきで錠をねち切ると、いきなり懐中電燈で抽斗の内部を照らしたが、彼は思はず歡びの吐息をもらした。まづ眼を惹いたのは、一ト區切づゝ帶封を施した厚ぼつたい紙幣束であつた。そこで彼は悠々と、順序よくその紙幣束を取りあけて、一々數をよんで、それから懐中電燈で仔細に檢べたり、手の甲で撫で、みたりした。

なほ椅子を引きよせて、ゆつくり抽斗の中を探すと、金貨を入れた金袋が一つあつて、その下に額面二萬フランからの記名株券が一重詰まつてゐた。

『惜しいものだが、こいつは仕様がなない。』

で、株券だけはそのままにしておいた。獲物がきまつたので、今度は金貨をば、四五十フランだけ

表面の刻字を引きくらべてから、チョッキの衣囊へ取りこんだ。すつかりいゝ氣持になつて、慌てず騒がずといふ態度だ。

恰度そのとき、重い荷物を積んだ荷馬車が街を通りかゝつたので、その地響きのために窓硝子や箆の類ががたびし鳴つて、床に散らばつてゐた銀器までがかすかな音を立てた。

彼はその物音ではつと我れにかへつたが、懐中時計を出してみると、正に四時——もうぐづぐづしてはゐられない。そこで素早く金貨や紙幣を衣囊へねぢこみ、まだ何か残つてゐるはせぬかともう一度抽斗の中を覗くと、幾らかの小貨が書類の間に散らばつてゐるので、彼はそれをも取りこみながら、

「これはお小遣だ。」

卓子の上に、雅致ある青銅の文鎖が一つ置いてあつた。株券や寶石には手をつけなかつたほどの利口な男だが、今宵の記念としてこの文鎖を貰つてゆくのも悪くはあるまい——さう思つて猿臂をのべた瞬間、置時計が高々と四時を打ちだした音に、彼はぎよつとして立ちすくんだ。

やがてその音が歇むと、再び威壓するやうな、嚴かな静寂に立ちかへつて、室内はたつた一つの微動だも感じない。掛布の襜のほぐれる音や、乾いた木口の裂ける音——さうしたものは晝間眠つてゐる夜になると目ざめて來るものなんだが、それさへも今は死んだやうにしんと静まりかへつてゐる。

その静寂の中に聞えるものとしては、たゞ自分の動悸と、顫顫のあたりにづきん／＼波打つてゐる血の音だけだ。

彼は再びわけの分らない不思議な恐怖に囚はれた。何か只ならぬことが突發したゝめに、かう寂然となつたのではないか知ら。こんなときに迂濶と身じろきをしてこの静寂を掻き亂したら大變だ、といふやうな氣もした。

彼は懐中電燈を消して、闇の中に佇立した。それから、背を丸めて頸を前方へのぼし、呼吸を殺して聞き耳を聳てながら、ぢつと暖爐棚の方をのぞきこんだ。その棚の上では、小さな置時計があんなに判然と時を刻んでゐたのに、今はそれさへ止まつてゐる。さうだ、時計が止まつた。單にそれだけで、何も恐ろしいことではなかつたのだ。それにも拘らず、彼は背筋がぞつとした。そして何か差迫つた、恐ろしい危険に脅やかされてゐるやうな氣がして、いきなりナイフを逆手に持ち、懐中電燈を點けながら素早く身を轉はした。

と、薄ほんやりと蔭つた凹みの間に臥てゐる一人の老人の顔が見えた。その老人は口を半開きにして、兩眼をくわつと見開いたまゝ、彼の方を睨みつけてゐた。少しも恐れた氣色がなく、瞬きもしないで彼の眼中を見ずゑてゐるのだ。敷布の上にひろけた手は泰然として震へだも帯びてゐない。夜具の

間から突き出した脚も、落ちつき拂つたやうにちつとしてゐた。

そのとき彼は、何者か、突然首を絞めに來はせぬかと思つた。その蒼白い無言の敵の伊吹が、今にも頬へかゝりさうな氣がした。

彼は顔を動かさずに、眼球だけを廻はして戸口の方を見た。紙幣束が衣囊から抜けて床へころがつてゐるけれど、それを拾ふ氣にもなれず、寧ろそのまゝ逃げだしたかつた。しかし老人が睨んでゐるので、どうしたつて戸口まで逃げられさうもない。驅けだしたら老人が聲を立てるだらう。さうすると、どうせ逃げ終せるわけにゆかぬ。

で、彼は一秒間の躊躇もなく、まるで死物狂ひになつた獸のやうに、寢臺へ駆け寄るが早いか、ナイフを振りあげて怒れる掛け聲もろ共、老人の胸を續けざまに二度欄もとほれと突き刺した。が、老人は呻き聲一つ立てないので、何の物音もなく、たゞ枕が靜かに床へころけて、頭がぐつたりと落ちこんだ。そして、口は相變らず半開きのまゝで、頤がぐつくりと胸の方へくつついた。

彼は後退りをして、犠牲者の様子を覗きこんだ。小さな懐中電燈の燈りだけでは、シャツの上から刺した創口がどんな風か、血が出たか何うかも見分けがつかなんだ。しかし手許狂はず正しく心臓を突き刺した筈だ。その證據に、犠牲者の相好が少しも變つてゐない。最初の一撃が狙ひを過またず、

ピストルの一發と同様、即座に呼吸の根を止めたらしい。

彼は自分の腕の確かさを誇りながら、

「貴様は家にゐて、おれを見張つてゐるやがつたな。うむ、見たな、此奴め。」

と憎さげに怒鳴つた。しかし老人の顔面を覗くと、少しも表情が崩れてゐない。ひよつとすると、ナイフが夜具を透したゞけで、老人は依然生きてゐて、皮肉にも彼を監視してゐるのではあるまいか。彼は向つ腹を立て、ナイフを振りあげるが早いか、また續けざまに老人の胸を突き刺した。そして刃を突こむときの鈍い音響に陶酔して、止め度なく喚きながらその打撃をくりかへした。シャツはめちやくちやに破れ、肉には大きな創口がぐつくりと開いたが、老人は泰然自若として相變らず凄まじく彼を睨みつけてゐた。彼はいよく堪らなくなつて、懐中電燈を投げだすと、今度こそは確と呼吸の根を止めようとして、頸つたまを押へつけた。

と、振りあげた右手は宙に止まり、叫びかけた呪ひも唇に凍てついた。といふのは、老人の頸を押へた左の手先に、何とも譬へやうのない不氣味な冷さを感じたからである。その冷さは瀕死の人の汗ばんで痙攣してゐる皮膚ののではなくて、すでに長時間を経過した屍體の冷さであつた。

空家と信じきつて入つて來たのに、案外にもそこに屍體が横はつてゐたのだ。それで、この家が墓

穴のやうに眞暗で、いやに森閑としてゐたわけが漸と呑みこめた。

何處か遠いところで時計が五時を打つた。

彼は慌てふためいて帽子を引つかみ、うろ記憶の祈禱の文句を口に唱へながら、もう落ちこぼれた獲物なんかには目もくれずに、轉けるやうにして其家を飛びだした。

夜
鳥
終

昭和三年六月二十日印刷

夜鳥

昭和三年六月二十三日發行

(金壹圓七拾錢)

譯者檢印



譯者 田中早苗

發行者 和田利彦

印刷者 堀江關武

印刷所 常磐印刷所

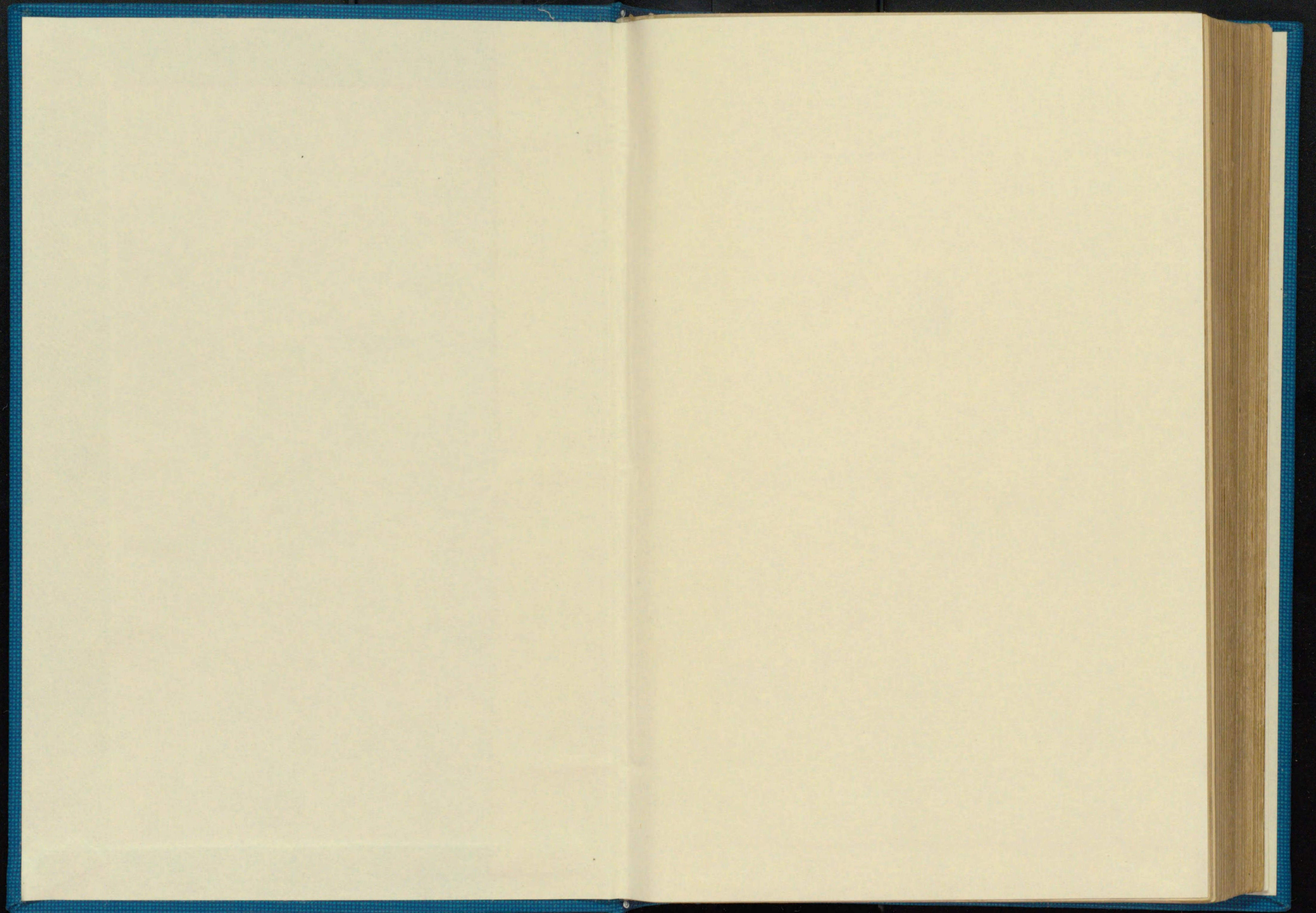
發行所

東京市京橋區南傳馬町二丁目六番地
(電話京橋六五二・四一五番)
(振替口座東京一六一七)

春陽堂

RI-2N
-14







1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100

